

須玖岡本遺跡 2

福岡県春日市岡本所在遺跡の発掘調査概要

春日市文化財調査報告書 第53集

序

春日市は福岡市の南に隣接し、昭和47年の市政施行以来、福岡市のベッドタウンとして都市化が進みました。かつての農地や山林は宅地として開発されてきました。一方、これらの開発に伴い遺跡の発掘調査が行われ、貴重な文化財が多く確認されることになりました。特に春日丘陵北部には東西約1.5km、南北2kmの範囲に須玖岡本遺跡を中心とする須玖遺跡群があり、弥生時代の奴国の中心地として栄えていたことが窺えます。

本書は春日市が平成8年度以降に発掘調査を実施した須玖岡本遺跡の報告書です。須玖岡本遺跡は奴国の王墓をはじめ、王族墓、青銅器生産工房跡などがあり、我が国の歴史において弥生時代のクニを考えるための重要な遺跡であるといえます。

本書が埋蔵文化財への理解を深める研究資料として活用され、また市民の皆様に郷土の歴史を知る一助となれば幸いです。

最後になりましたが、地権者の皆様をはじめ発掘調査に際しご指導ご協力を賜りました方々に深く謝意を申し上げます。

平成20年3月31日

春日市教育委員会

教育長 山 本 直 俊

例 言

- 1 本書は春日市教育委員会が平成8・12年度に調査した須玖岡本遺跡の概要報告書である。
- 2 遺跡の範囲については平成11年度から、福岡県教育委員会と「須玖岡本遺跡保存活用検討委員会」にて協議を重ね、線引きを行った。
- 3 遺物の図面作成及び製図は岡本地区第11次調査を森井千賀子、盤石地区第2次調査を境靖紀、岡本山地区第6次調査を境、末田敬子、吉富千春が行った。
- 4 遺構の実測は岡本地区第11次調査を森井、盤石地区第2次調査、岡本山地区第6次調査を境が行い、製図は田中由紀、須崎葉津子、牧平佳恵が行った。なお、岡本山地区第6次調査の製図にはJW-cadを使用した。
- 5 掲載写真は遺構写真を調査員が撮影し、遺物写真は岡紀久夫（文化財写真工房）が撮影した。なお、空中写真については、（有）空中写真企画による。
- 6 本書に使用した2万5千分の1の地形図は、国土地理院発行の『福岡南部』（1929年）である。
- 7 本書の遺構実測図に用いた方位は磁北である。
- 8 本書の執筆はI-3を丸山康晴、Ⅲ-2・3を境、他を森井が行い、編集は森井が行った。

本文目次

I	はじめに	1
1	調査に至る経過	1
2	調査の組織	1
3	遺跡の名称について	2
II	位置と環境	5
III	調査の概要	8
1	岡本地区11次調査	8
(1)	遺構	8
(2)	遺物	10
(3)	小結	12
2	盤石地区2次調査	13
(1)	遺構	13
(2)	遺物	17
(3)	小結	21
3	岡本山地区6次調査	22
(1)	遺構	22
(2)	遺物	30
(3)	小結	37

図版目次

図版1	1 岡本地区11次調査調査区全景
	2 岡本地区11次調査調査区（北から）
図版2	1 岡本地区11次調査1号土壙（北から）
	2 岡本地区11次調査溝状遺構（北から）
図版3	岡本地区11次調査出土遺物
図版4	1 盤石地区2次調査東半調査区全景（西から）
	2 盤石地区2次調査西半調査区全景（西から）
図版5	1 盤石地区2次調査1号竪穴住居跡（北から）
	2 盤石地区2次調査1号竪穴住居跡内土坑土層断面（北から）
	3 盤石地区2次調査1号土坑（東から）
図版6	盤石地区2次調査出土遺物

- 図版7 1 岡本山地区6次調査Aトレンチ全景（北から）
 2 岡本山地区6次調査Dトレンチ石戈出土状態（東から）
 3 岡本山地区6次調査Bトレンチ全景（南から）
- 図版8 1 岡本山地区6次調査Eトレンチ遺構検出状態（南から）
 2 岡本山地区6次調査Eトレンチ2号甕棺墓検出状態（西から）
 3 岡本山地区6次調査Eトレンチ小児棺墓検出状態（西から）
 4 岡本山地区6次調査Eトレンチ1号溝土層断面（南から）
- 図版9 1 岡本山地区6次調査Gトレンチ6号甕棺墓検出状態（西から）
 2 岡本山地区6次調査Hトレンチ全景（西北から）
 3 岡本山地区6次調査Iトレンチ全景（東から）
- 図版10 1 岡本山地区6次調査Jトレンチ全景（北東から）
 2 岡本山地区6次調査Mトレンチ全景（西から）
 3 岡本山地区6次調査Lトレンチ2号溝土層断面（東から）
 4 岡本山地区6次調査Mトレンチ遺構検出状態（北から）
- 図版11 1 岡本山地区6次調査Nトレンチ遺構検出状態（南から）
 2 岡本山地区6次調査Pトレンチ南壁土層断面（北から）
 3 岡本山地区6次調査Pトレンチ遺構検出状態（東から）
 4 岡本山地区6次調査Qトレンチ土層断面（南から）
 5 岡本山地区6次調査作業風景
- 図版12 岡本山地区6次調査出土甕棺
- 図版13 岡本山地区6次調査出土遺物

挿 図 目 次

第1図	須玖岡本遺跡の範囲と調査地点（1/2,500）	3
第2図	須玖岡本遺跡周辺遺跡分布図（1/25,000）	6
第3図	須玖岡本遺跡位置図	7
第4図	岡本地区11次調査遺構配置図（1/100）	8
第5図	岡本地区11次調査1号土壌実測図（1/40）	9
第6図	岡本地区11次調査1号土壌土層断面実測図（1/40）	9
第7図	岡本地区11次調査溝状遺構（調査区北壁）土層断面実測図（1/40）	10
第8図	岡本地区11次調査出土土器実測図（1/3・1/4）	11
第9図	岡本地区11次調査出土石器実測図（1/2）	12
第10図	盤石地区2次調査1号竪穴住居跡実測図（1/30）	14

第11図	盤石地区2次調査遺構配置図 (1/100)	15~16
第12図	盤石地区2次調査2号竪穴住居跡実測図 (1/40)	17
第13図	盤石地区2次調査1号土坑実測図 (1/30)	18
第14図	盤石地区2次調査出土弥生土器実測図 (1/4)	19
第15図	盤石地区2次調査出土土師器・須恵器・瓦実測図 (1/3)	19
第16図	盤石地区2次調査出土鑄造関連遺物・鉄器実測図 (1/2)	21
第17図	岡本山地区6次調査遺構配置図 (1/400)	23
第18図	岡本山地区6次調査A・Cトレンチ土層断面実測図及びGトレンチ遺構実測図 (1/40)	24
第19図	岡本山地区6次調査B・Pトレンチ遺構実測図及び土層断面実測図 (1/40)	25
第20図	岡本山地区6次調査Eトレンチ遺構実測図及び土層断面実測図 (1/40)	26
第21図	岡本山地区6次調査Fトレンチ遺構実測図及び土層断面実測図 (1/40)	27
第22図	岡本山地区6次調査K・Lトレンチ遺構実測図及び土層断面実測図 (1/40)	28
第23図	岡本山地区6次調査D・O・Qトレンチ遺構実測図及び土層断面実測図 (1/40)	29
第24図	岡本山地区6次調査2・6号甕棺墓実測図 (1/30)	31
第25図	岡本山地区6次調査3号甕棺墓実測図 (1/20)	32
第26図	岡本山地区6次調査出土甕棺実測図 (1/8)	33
第27図	岡本山地区6次調査出土小児棺実測図 (1/4)	34
第28図	岡本山地区6次調査出土弥生土器実測図 (1/4)	34
第29図	岡本山地区6次調査出土須恵器・土師器実測図 (1/3)	35
第30図	岡本山地区6次調査出土瓦実測図 (1/4)	35
第31図	岡本山地区6次調査出土陶磁器実測図 (1/3)	36
第32図	岡本山地区6次調査出土石器実測図 (1/2)	36

目 次

表1	須玖岡本遺跡調査次数新旧対照表	4
表2	盤石地区2次調査出土土器観察表	20

I はじめに

1 調査に至る経過

須玖岡本遺跡は、昭和4年の京都帝国大学文学部考古学教室（当時）による発掘調査以降、九州大学文学部考古学研究室、福岡県教育委員会、春日市教育委員会によって発掘調査が行われてきた。昭和61年以降、春日市教育委員会によって行われた発掘調査は、民間開発行為による緊急発掘調査や遺構の確認調査が主体であり、これらの発掘調査によって特に弥生時代の墓地の様相が徐々に明らかになってきた。また、福岡県における大規模遺跡保存活用計画の中に須玖岡本遺跡の保存推進があげられ、さらに遺跡の範囲確認、内容把握のため、遺跡の重要範囲確認調査を地権者の協力を得ながら行いつつ、保存及び史跡指定を行ってきた。

岡本地区11次調査は平成8年度に家屋の建て替えに伴う緊急発掘調査である。王墓地点の南部で、昭和54・55年に甕棺墓が多数調査された旧4丁目地点との間に位置する。王墓から南に約70mに位置する岡本地区3次調査地点のやや西南に位置する。岡本地区3次調査では明確な遺構が検出されておらず、王墓と一般的な集団墓域との間の土地利用がどのように広がるか念頭に置きながら調査を行った。

盤石地区2次調査は平成12年度に店舗兼個人住宅の建て替えに伴う緊急発掘調査である。調査対象地は春日丘陵北側斜面が平地へ地形が変化する境目付近にあり、青銅器生産工房跡が検出された坂本地区（旧須玖坂本遺跡）に近く、これらの工房跡の広がりに関心をもたれた。

岡本山地区6次調査は平成12年度、岡本公園及び熊野神社における重要遺跡確認調査である。これまでの須玖岡本遺跡では宅地化が早くに進んだことから調査面積は狭く、点的な調査が多かったといえる中で、まず、対象地に遺構があるかどうか確認調査を行い、対象地における遺構の内容把握を目的とした。

2 調査の組織

発掘調査を行った平成8・12年度、報告書刊行の最終的作業を行った平成19年度における春日市教育委員会の体制は下記のとおりである。

平成8年度 岡本地区11次調査発掘調査

教 育 長	三原 英雄	教育部長	柴田 利行
文化財課長	井上 武美	文化財課長補佐兼管理係長	谷 都師之
管理係事務主査	田中 和彦	文化財係係長	丸山 康晴
事務主査	村上不二夫	技術主査	平田 定幸
事務主査	増永 睦司	技術主任	中村 昇平

嘱 託 清永久仁子

技術主任 吉田 佳広

技術主任 古川千賀子

嘱 託 清原 史代

平成12年度 盤石地区2次・岡本山地区6次発掘調査

教 育 長 河鍋 好一

教育部長 岡本 嘉彦

文化財課長 鬼倉 芳丸

文化財担当係長 丸山 康晴

管理担当係長 古賀 俊光

技術主査 平田 定幸

事務主査 北島 公則（～6月）

技術主査 中村 昇平

事務主査 白水富士子（7月～）

技術主任 吉田 佳広

事務主査 増永 睦司

技術主任 森井千賀子

事務主任 十時 弘之

技術主任 境 靖紀

嘱 託 池田 正大

嘱 託 井上 義也

平成19年度 報告書作成

教 育 長 山本 直俊

文化財担当係長 丸山 康晴

社会教育部長 鬼倉 芳丸

主査 中村 昇平

文化財課長 古賀 俊光

主査 吉田 佳広

管理担当係長 渡邊 厚子

主査 森井千賀子

主査 塩足 雅弘

主任 境 靖紀

主事 北里ひとみ

嘱託 吉田 浩之

嘱託 長谷部真弓

3 遺跡の名称について

須玖岡本遺跡は昭和54年度から春日市教育委員会が発掘調査、確認調査を行ってきたが、調査地点の増加と保存活用を検討するなかで、平成13年度に「須玖岡本遺跡」の範囲を決定した。

平成14年度には須玖岡本遺跡を地形及び遺構類似性などで4地区に分けて呼び分けることとし、平成19年度には通し次数としていたものや小字名を遺跡名としていたもの、試掘・確認調査等を含め、地区ごとに次数整理を行った。

度々の遺跡名称変更となった箇所もあり、混乱を招くものと承知しているが、別表・別図のとおり整理変更を行い、今後「須玖岡本遺跡〇〇地区〇次調査」と次数を重ねることとしている。



第1図 須玖岡本遺跡の範囲と調査地点 (1/2,500)

表1 須玖岡本遺跡調査次数新旧対照表

2007年7月9日改正

	地区名	次数	旧遺跡名	発掘調査年度
1	坂本地区	1次	須玖坂本遺跡1次調査	1990年
2	"	2次	須玖坂本遺跡3次調査	1991年
3	"	3次	須玖坂本遺跡4次調査	1991年
4	"	4次	須玖坂本遺跡5次調査	1992年
5	"	5次	須玖坂本遺跡6次調査	1993年
6	"	6次	須玖坂本遺跡(試掘調査)	1999年
1	岡本地区	1次	須玖岡本遺跡1次調査	1986年
2	"	2次	須玖岡本遺跡2次調査	1987年
3	"	3次	須玖岡本遺跡3次調査	1987年
4	"	4次	須玖岡本遺跡4次調査	1988年
5	"	5次	須玖岡本遺跡5次調査	1989年
6	"	6次	須玖岡本遺跡6次調査	1989年
7	"	7次	須玖岡本遺跡7次調査	1990年
8	"	8次	須玖岡本遺跡8次調査	1990年
9	"	9次	須玖岡本遺跡9次調査	1991年
10	"	10次	須玖岡本遺跡12次調査	1994年
11	"	11次	須玖岡本遺跡13次調査	1996年
12	"	12次	須玖岡本遺跡14次調査	1996年
13	"	13次	須玖岡本遺跡17次調査	2001年
14	"	14次	平成14年度確認調査	2002年
15	"	15次	平成15年度確認調査	2003年
16	"	16次	平成17年度確認調査	2005年
17	"	17次	平成17年度確認調査	2005年
1	岡本山地区	1次	岡本遺跡1次(旧4丁目遺跡)	1979年
2	"	2次	岡本遺跡2次(旧4丁目遺跡)	1980年
3	"	3次	須玖岡本遺跡11次調査	1991年
4	"	4次	岡本山遺跡	1993年
5	"	5次	岡本ノ上遺跡3次	1995年
6	"	6次	須玖岡本遺跡16次調査	2000年
7	"	7次	平成17年度確認調査	2005年
1	盤石地区	1次	須玖岡本遺跡10次調査	1991年
2	"	2次	須玖岡本遺跡15次調査	2000年
3	"	3次	須玖岡本遺跡18次調査	2001年
4	"	4次	平成15年度確認調査	2003年
5	"	5次	平成16年度確認調査	2004年
6	"	6次	平成18年度確認調査	2006年

II 位置と環境

須玖岡本遺跡は牛頸山から派生する春日丘陵の北端にある低台地上に位置し⁽¹⁾、標高18.7～37.3 mを測る。春日丘陵の北部から低地にかけては弥生時代の遺跡が多く所在し、特に東西約1 km、南北1.5 kmの範囲を須玖遺跡群と称する⁽²⁾。須玖遺跡群は南部と西部にある高辻遺跡、大谷遺跡、大南遺跡、竹ヶ本遺跡、赤井手遺跡で大溝が検出され、これらの大溝が谷間を越えて繋がる可能性が高いことから、須玖遺跡群は大環濠集落であると考えられる。須玖岡本遺跡は明治32年の王墓発見以降、京都大学、九州大学、福岡県教育委員会、春日市教育委員会によって行われた発掘調査で、王族墓や青銅器生産工房跡が明らかとなり、須玖遺跡群の中でも中心的な集落といえる。

弥生時代前期の遺跡は雑餉隈遺跡、一の谷遺跡などがあり主に春日丘陵の周辺部にみられる。春日丘陵上の遺跡が中期を主体となすことから、中期に大規模な開発が行われたといえるが、平若A遺跡の調査で前期の墓壙が検出されており、前期の集落が今後検出される可能性がある。春日丘陵の西側では門田遺跡や原遺跡など、弥生時代中期から後期にかけての大きな集落があり、また、その南には安徳台遺跡といった拠点的な集落がある。須玖遺跡群の北側では那珂川と御笠川にはさまれた台地上に井尻遺跡、那珂遺跡、比恵遺跡があり、これらの遺跡群でも中期から後期の青銅器生産関連資料も多く検出されている。

古墳時代になると須玖岡本遺跡内では円墳がある。春日丘陵上では赤井手古墳や竹ヶ本古墳などの首長墓があり、那珂川流域の首長墳として位置づけられる。集落跡はかなり少なくなり、低地では須玖永田遺跡や須玖黒田遺跡、丘陵上では赤井手遺跡や竹ヶ本遺跡などがある。古墳時代後期になると牛頸窯跡群で須恵器の生産が本格化し、牛頸川流域で春日平田遺跡など大規模な集落が形成される。

飛鳥～奈良時代の遺跡としては水城跡や官道があげられる。国特別史跡の大土居水城跡、天神山水城跡は狭長な丘陵間の谷間を塞ぐ大防衛線の一部である。また、水城西門と鴻臚館を結ぶ官道が先ノ原A遺跡、先ノ原B遺跡で確認され、これを北方向に延長すると須玖岡本遺跡の東側に官道が通ると推測される。市内では百済系単弁瓦が須玖岡本遺跡、赤井手遺跡から出土している。

中世になると春日丘陵上では寺屋敷B遺跡で地下式土壇から中国製褐釉壺と古瀬戸灰釉瓶子が出土しており、火葬蔵骨器であると考えられる。文献史料に白水荘が石清水八幡宮領としてみられる⁽³⁾が、上白水地区では中世の居館跡が発掘調査され、出土遺物から13世紀代には成立し近世まで存続したものと考えられる。また、近世の地誌に下白水地区に天浦城という筑紫氏の居城があったことが記されている⁽⁴⁾が、発掘調査等による確認はされていない。須玖岡本遺跡においても中世の遺構、遺物が検出されており、市域において主要な地点の一つ所であったと推測される。

註(1) 福岡土地分類基本調査(1984)の分類によると、丘陵の定義は標高101～200mであり、地質学的には春日市の南部を除いて丘陵は存在しない。しかし、これまで春日市の地形概略図には春日市の中央部で牛頸山から派生する地形を丘陵と説明している。須玖岡本遺跡が立地する範囲は丘陵の中でも中位段丘から低位段丘にかけて位置している。
(「第二章 第一節 一 地形概要」『春日市史 上巻』1995)

(2) これまで須玖岡本遺跡を中心とする遺跡群との観点から須玖岡本遺跡群とも記されているが、混乱をさけるため、ここでは須玖遺跡群とした。

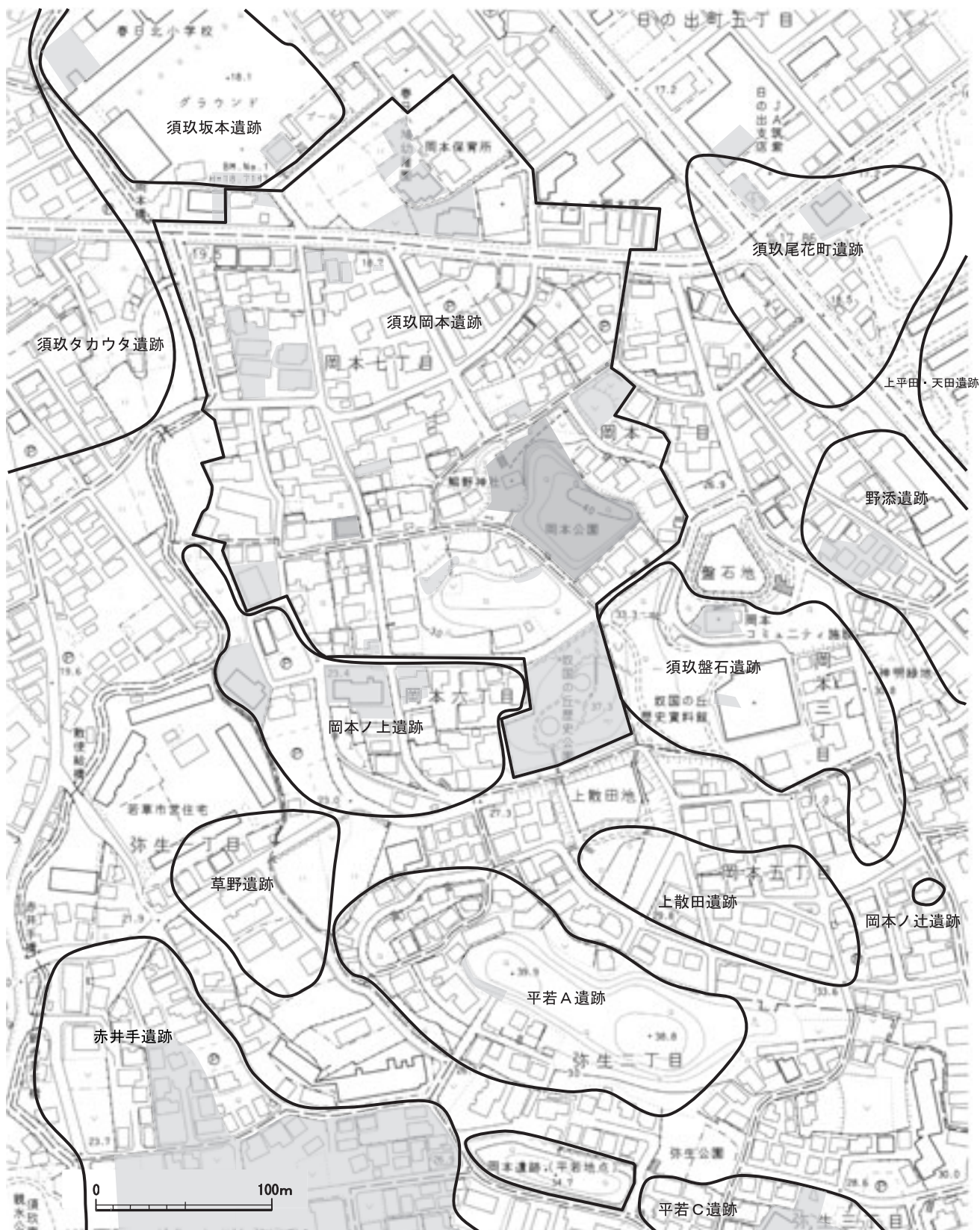
(3) 「第一章 第二節 荘園公領制」『春日市史 上巻』1995

(4) 「第三章 春日市域の中世の主要な遺構」『春日市史 上巻』1995



第2図 須玖岡本遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- 1 井尻B遺跡群 2 井尻C遺跡群 3 横手遺跡 4 寺島遺跡群 5 日佐遺跡群 6 上日佐遺跡群 7 弥永原遺跡群 8 日佐原遺跡
 9 川久保B遺跡 10 古水遺跡 11 天神免遺跡 12 日拜塚遺跡 13 辻畑遺跡 14 門田遺跡 15 中白水遺跡 16 寺田・長崎遺跡
 17 石尺遺跡 18 向田古墳 19 天神ノ木遺跡 20 ウトグチB遺跡 21 整理池遺跡 22 天神山水城跡 23 大土居水城跡 24 須玖岡本遺跡
 25 須玖坂本B遺跡 26 須玖五反田遺跡 27 須玖永田遺跡 28 須玖尾花町遺跡 29 上平田・天田遺跡 30 赤井手遺跡 31 竹ヶ本遺跡
 32 伯玄社遺跡 33 大南B遺跡 34 宮の下遺跡 35 大南遺跡 36 大谷遺跡 37 立石遺跡 38 笹原遺跡群 39 三筑遺跡群 40 井相田遺跡群
 41 麦野B遺跡 42 井相田A遺跡 43 麦野C遺跡 44 麦野B遺跡群 45 南八幡遺跡群 46 下大荒遺跡 47 大荒遺跡 48 雑餉隈遺跡群
 49 井相田B遺跡群 50 原町遺跡 51 駿河A遺跡 52 先ノ原B遺跡 53 先ノ原遺跡 54 春日公園内遺跡 55 小倉水城跡 56 惣利1号竈跡
 57 惣利北遺跡 58 向谷遺跡 59 惣利遺跡 60 惣利西遺跡 61 惣利東遺跡 62 警弥郷B遺跡群



第3図 須玖岡本遺跡位置図

III 調査の概要

1 岡本地区11次調査

調査地点は「王墓」地点から南に約75mの位置で、春日丘陵の先端が北側の低地へと続く西側斜面にある。当地は畑開墾及び宅地造成により、調査対象地の北側と西側は大きく削平されている。発掘調査当初、当地と北側民家との間には約3mの比高差があり、石積による擁壁があった。地権者の話によると、この石積は戦後に大刀洗飛行場に使われていた石敷を利用したとのことである。

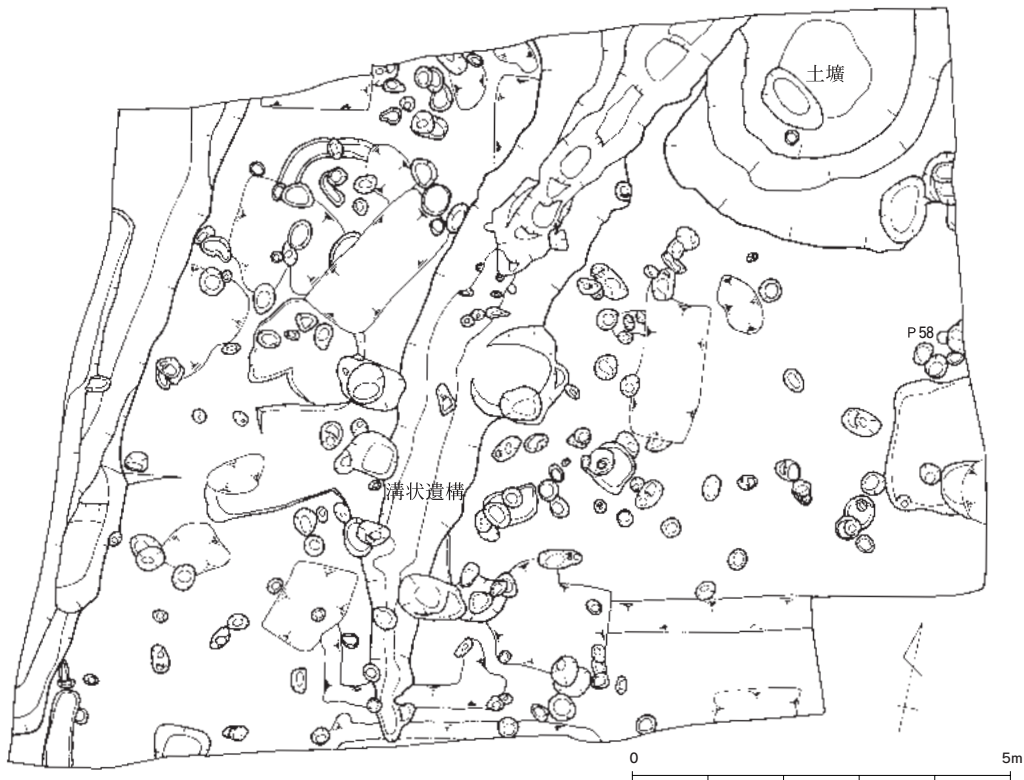
検出した遺構面は、東西方向に等高線が走り、標高は南で24.2m、北で23.6mであるが、調査区の西辺は東から西に低く傾斜し、約60cm程盛土がされていた。

検出した遺構は土壇、溝状遺構、ピットである。その他、既存建物建設による攪乱も多い。ピットや遺構検出面から弥生土器が出土したが、墓や住居などの遺構は検出されなかった。

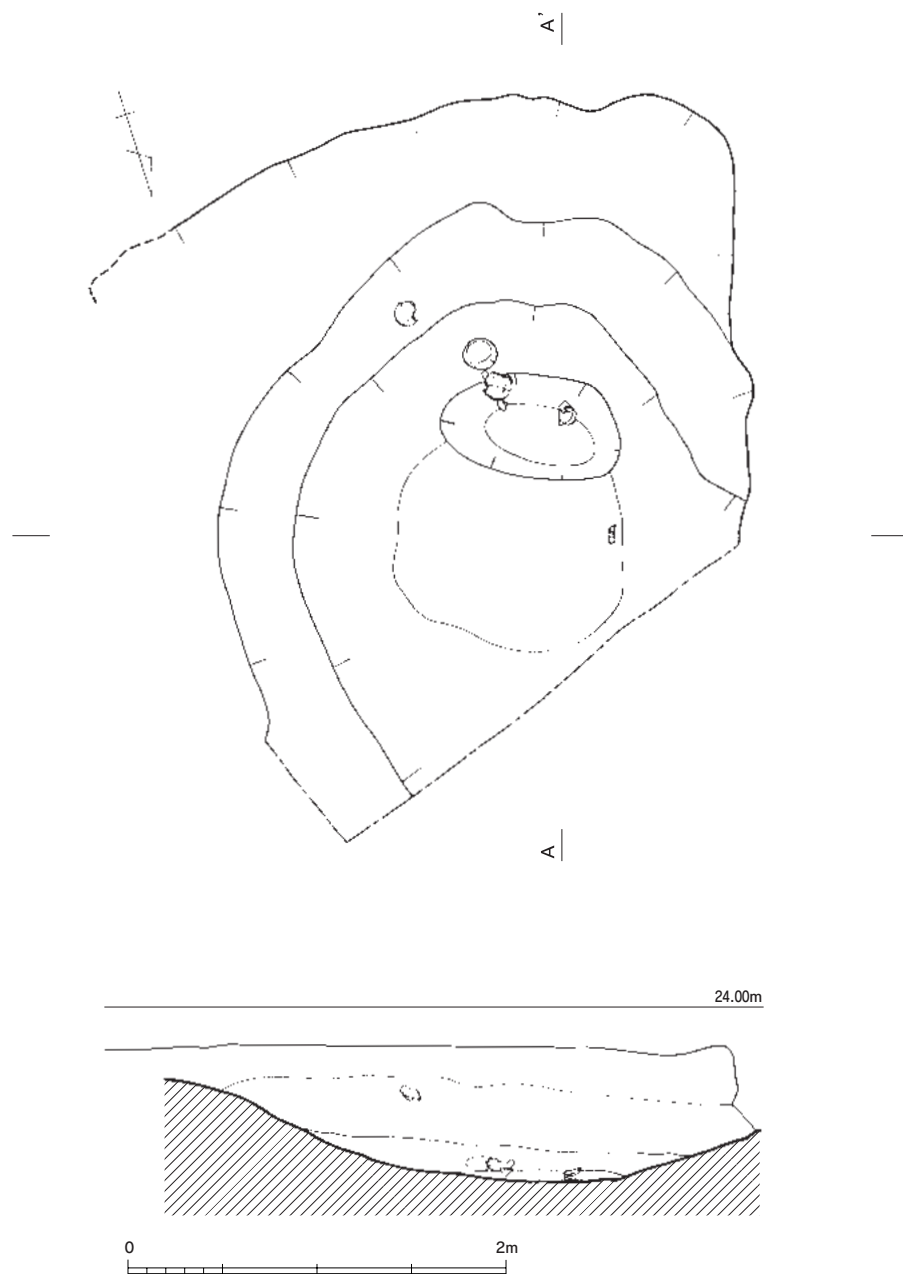
(1) 遺構

土壇（図版2-1、第5図）

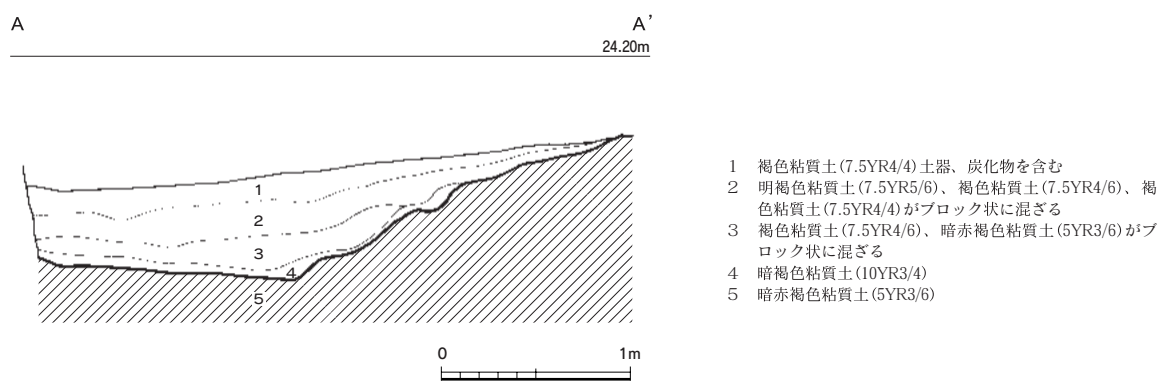
1号土壇は調査区の北東隅で検出した。楕円形を呈し長軸2.8m以上、短軸（残存長）2.8mを測る。深さは約50cmで、底面の南西部の位置に長軸96cm、短軸54cm、深さ8cmの浅い掘り込みが



第4図 岡本地区11次調査遺構配置図（1/100）

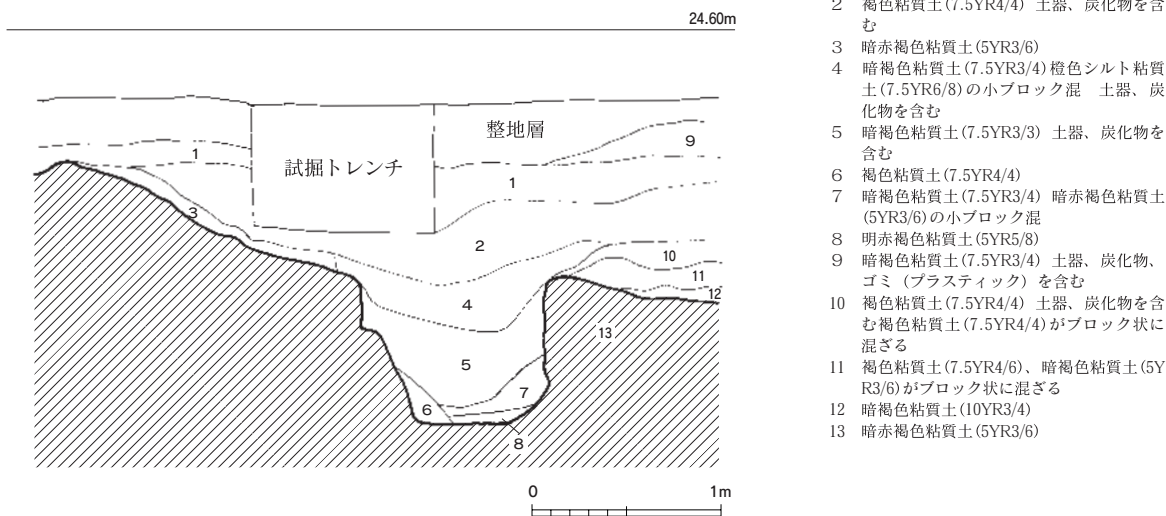


第5図 岡本地区11次調査1号土壌実測図 (1/40)



- 1 褐色粘質土(7.5YR4/4)土器、炭化物を含む
- 2 明褐色粘質土(7.5YR5/6)、褐色粘質土(7.5YR4/6)、褐色粘質土(7.5YR4/4)がブロック状に混ざる
- 3 褐色粘質土(7.5YR4/6)、暗赤褐色粘質土(5YR3/6)がブロック状に混ざる
- 4 暗褐色粘質土(10YR3/4)
- 5 暗赤褐色粘質土(5YR3/6)

第6図 岡本地区11次調査1号土壌土層断面実測図 (1/40)



第7図 岡本地区11次調査溝状遺構（調査区北壁）土層断面実測図（1/40）

ある。この掘り込み付近から土師皿3点が出土した。

溝状遺構（図版2-2）

調査区の中央で、南北方向の溝状遺構を検出した。この溝状遺構は旧地形の等高線におおよそ平行する方向に延びている。底面までの深さは北端で96cm、南端で5cmであり、傾斜がかなりあることから、水路としての用途ではなく、通路のような機能をしていたのでないと思われる。1号土壇を切るが、出土遺物から時期差はほとんどないといえる。

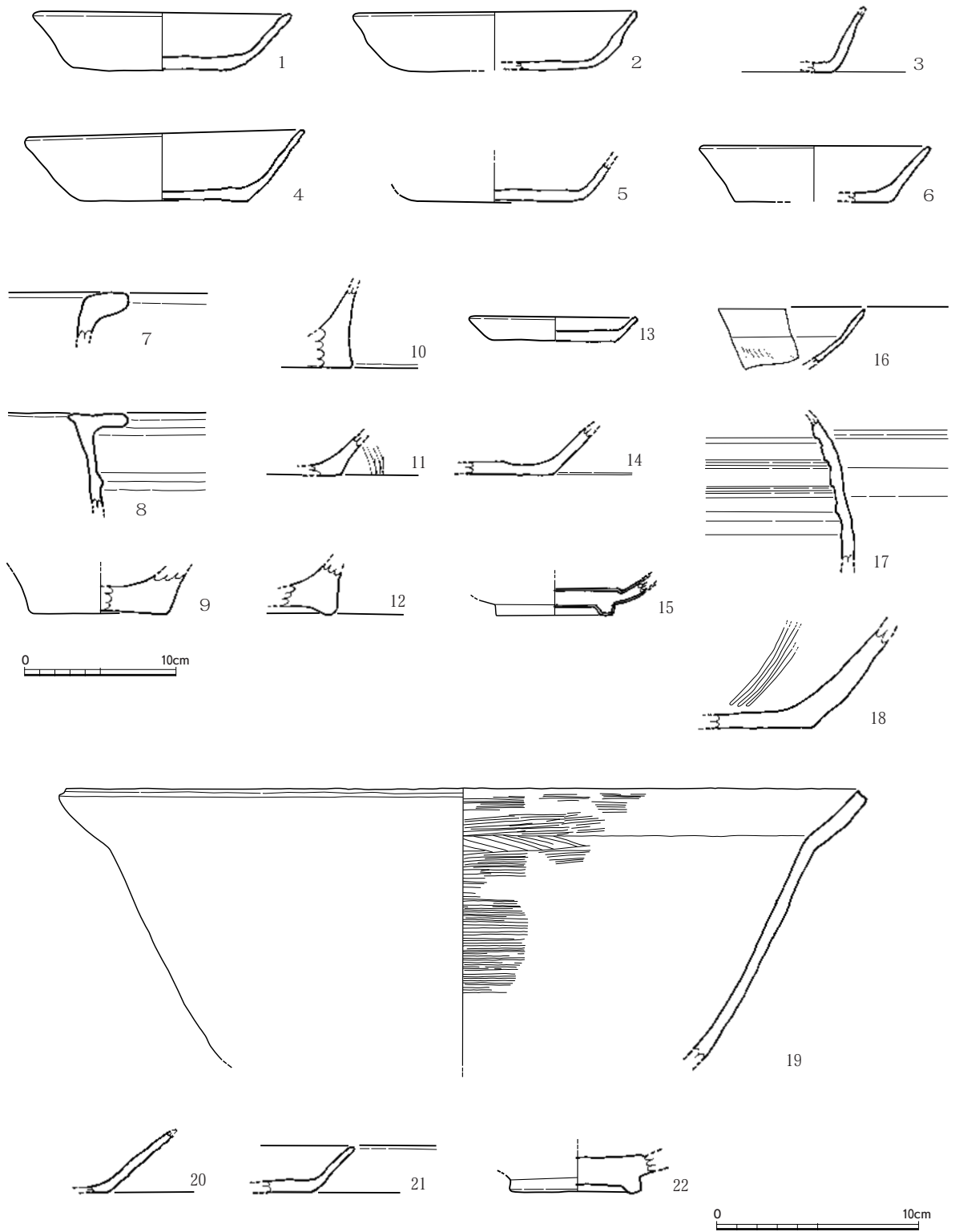
(2) 遺物

土器・陶磁器（図版3、第8図）

1～5は1号土壇から出土した。いずれも土師器の椀で糸切り底である。1は胎土に砂粒をほとんど含まない。口径12.8cm、器高2.8cm、底径7.8cmを計る。2は口縁部から底部にかけて約1/4弱残存する。復元口径14.0cm、器高2.9cm、復元底径10.0cmを計る。3は底部を約1/2残存する。胎土は砂粒をほとんど含まない。4は底部がわずかにあげ底になり、1・2と比べ底部と体部の境が明瞭である。口径13.8cm、器高3.3cm、底径8.1cmを計る。5は底部を約1/2程残存する。底径8.7cm。胎土は砂粒をほとんど含まない。

6はP58より出土した。口縁が直線的にひらく。口縁部から底部にかけて約1/4程残存する。復元口径11.3cm、器高2.7cm、復元底径7.7cmを計る。

7～19は溝状遺構から出土した。7～12は弥生土器の細片である。他に遺構や遺構検出面から出土した弥生土器はいずれも細片で、ほとんどが中期後半の時期のものである。13は土師皿で、底部と口縁部の一部を残存する。復元口径8.3cm、器高1.2cm、胎土は砂粒をほとんど含まない。糸切り底。14の土師皿も糸切り底である。15～17は陶磁器である。17は青磁椀の口縁部細片。内面に櫛



第8図 岡本地区11次調査出土土器実測図 (1/3・1/4)

描き模様があり、釉は灰オリーブ色を呈する。同安系青磁碗 I 類。16は青磁の壺の胴部細片である。釉は外面が灰色、内面がオリーブ灰色を呈する。外面にはピンホールあり。15は青磁の碗で、底部のみ残存する。胎土は灰白色、釉は灰オリーブ色を呈する。高台径5.7cmを計る。18は瓦質土器の捏ね鉢である。底部を1/5程残存する。胎土は砂粒をほとんど含まない。外面は灰黄色、内面は淡黄色を呈する。19は土師質の鉢である。口縁～胴部にかけて約2/3程残存する。復元口径40.0cmを計る。外面には煤の付着がみられる。

20～22は遺構検出面で出土した。20、21は土師器碗の細片である。20は器壁の磨滅が著しく調整不明。21は糸切り底である。22は青磁の碗で、底部のみ残存する。胎土は灰白～にぶい橙色、施釉は灰白色を呈する。高台形6.6cmを計る。

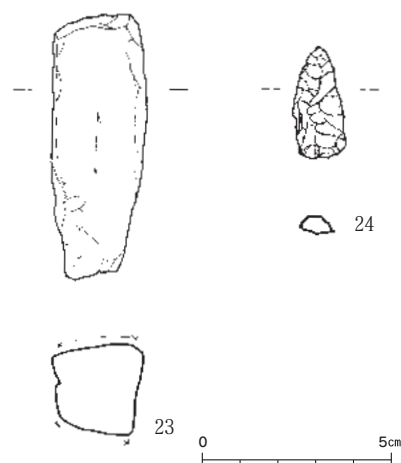
石器（図版3、第9図）

石器は攪乱から砥石が出土した。残存長7.0cm、幅2.5cm、厚さ2.4cmを計る。断面形はほぼ四角形を呈し、相対する2面に研磨痕がある。石鏃は黒曜石製で包含層から出土した。法量は全長3.0cm、幅1.35cm、厚さ0.5cmを計る。

(3) 小結

今回の調査では弥生時代については、ピットではあるが遺構、遺物とも検出され、墓域ではないことが確認された。弥生土器もパンコンテナー1箱程出土しているが、大半が細片である。この他、検出した土壙及び溝状遺構から出土した陶磁器の時期は12世紀中～後半のものである。同じく土壙や溝状遺構から出土した土師器はすべて糸切り底で、個体数は杯aが3点、小皿aが1点と少ないが、法量から12～13世紀のものと考えられる⁽¹⁾。須玖岡本遺跡で中世の遺構をみると、岡本地区1次調査地点で中世の溝が検出されており、同時期の遺構と考えられる。また、地形的にみても春日丘陵の先端に位置し北から東にかけての見通しがよく、岡本一帯に中世の山城または居館があった可能性が高いといえる。

註(1) 横田賢次郎編「大宰府条坊跡Ⅱ」太宰府市の文化財第7集(1983)



第9図 岡本地区11次調査出土
石器実測図(1/2)

2 盤石地区2次調査

調査地点は春日丘陵の北側斜面が、低地へと地形が変換する部分に位置し、標高は19m前後をはかる。

西約50mに位置する盤石地区3次調査では10点の青銅器鋳型が出土し、西北約200mの位置に弥生時代の大規模な青銅器工房として著名な、坂本地区が存在することから、当調査地点も青銅器鋳造工房の存在が期待された。

今回の発掘調査は、店舗付個人専用住宅の建て替えに伴う緊急発掘調査（国県補助事業）である。店舗を営業しながら発掘調査を行わなければならない、対象地を西側2/3程のⅠ区と東側既存建物部分のⅡ区に分け、Ⅰ区を平成12年4月20日から5月19日に調査し、Ⅱ区を平成12年10月6日から10月12日まで調査を行った。調査面積はⅠ区・Ⅱ区合わせて137.36㎡をはかる。

Ⅰ区を重機で表土除去を行ったところ、本来、南から北へ緩やかに傾斜する地形になるはずだが、鳥栖ローム層下部でみられる通称“雀の卵”が露出し、平坦となっていたことから、当地は著しく地形が改変されていると判断した。そのため、Ⅰ区の南端部付近では遺構が検出できなかった。また、Ⅰ区北西端では約3.5m幅の溝状遺構が平面で確認された。掘削したところ底面近くにアルミ製の雨傘骨やアルミホイールなどが含まれていたため、近年の攪乱であると判断した。

検出した遺構は、竪穴住居跡2軒、土坑1基、溝状遺構5条、ピットである。時期的に竪穴住居跡は弥生時代のもの、土坑は古代のもの。溝状遺構は弥生土器しか含まれていなかったが、とても浅いので正確に時期を示すかどうかわからない。

(1) 遺 構

竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（図版5－1、第10図）

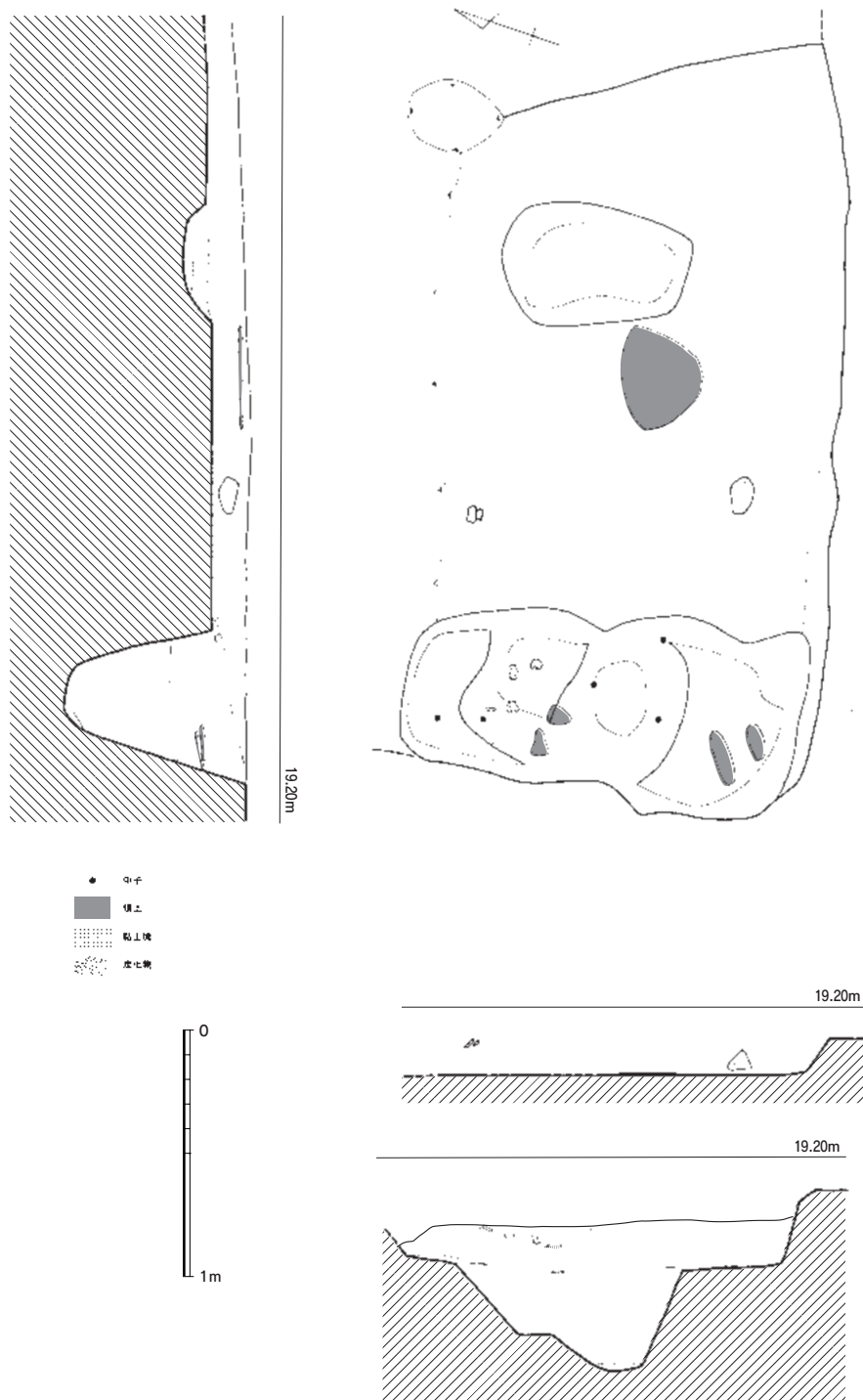
Ⅰ区中央付近で検出された。方形を呈し、1号土坑に切られる。検出時に2号竪穴住居跡と一連の可能性を考えたが、覆土が異なり、掘削してみると床面のレベルも異なることから、異なる2つの竪穴住居跡であると判断した。

北側の攪乱で破壊されており、東西3.35m、南北1.64m、深さ0.2mを測る。中央部付近で焼土が面的に確認され、その北側付近で鋳型石材片が1点出土した。

住居跡西端では長軸1.62m、短軸0.8m、深さ0.59mを測る屋内土坑を検出した。段掘りになっており、壁面がやや赤変し、焼土がみられたが、被熱によって硬化した様子は認められなかった。また、土坑内から銅矛中子5点、鉄製品2点が出土した。

2号竪穴住居跡（第12図）

Ⅰ区中央付近で検出された。方形を呈し、1号土坑、1号竪穴住居跡に切られる。東西5.15m、南北2.4mを測り、北半を攪乱で破壊される。西端にベッド状遺構を付設する。支柱穴は検出できなかった。

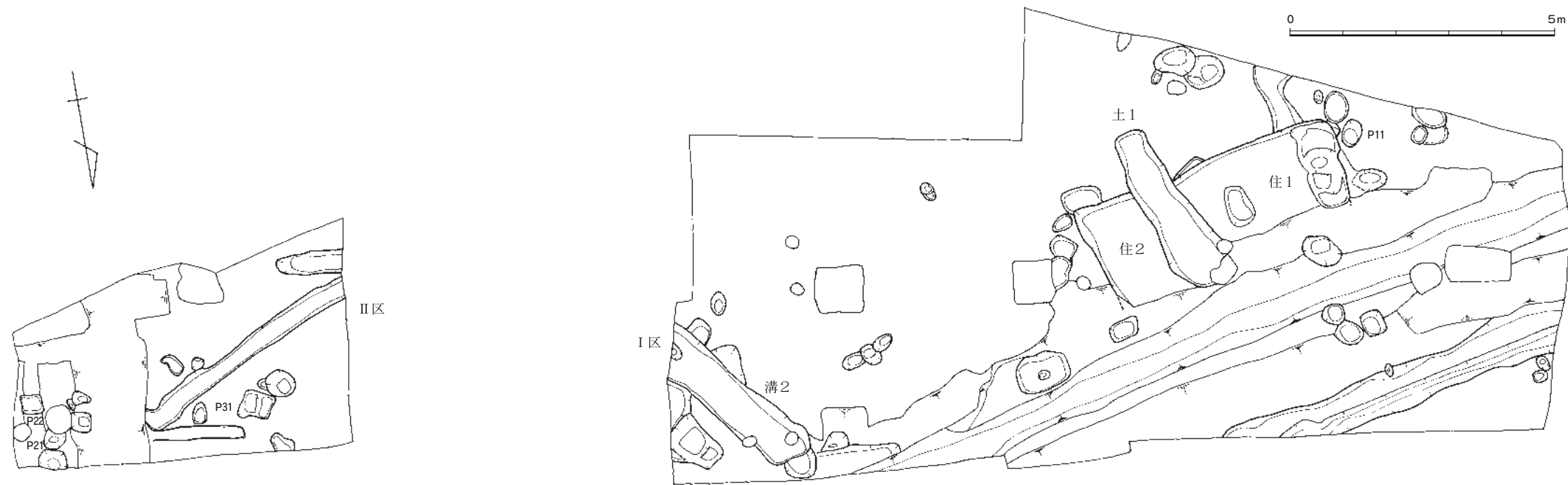


第10図 盤石地区2次調査1号竪穴住居跡実測図(1/30)

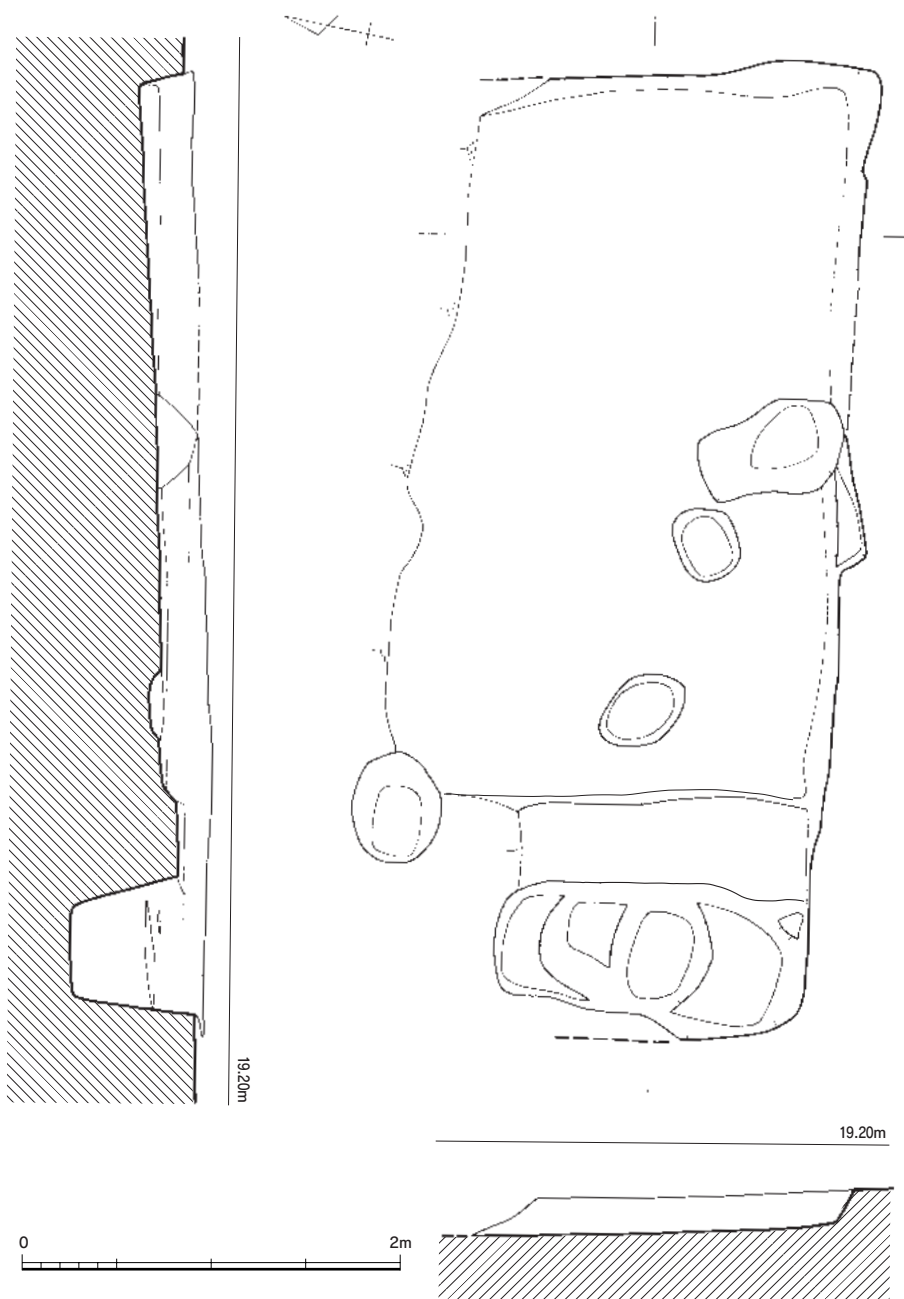
土 坑

1号土坑

I区中央付近で検出した。1・2号竪穴住居跡を切る。東西1.3m、南北3.3m、深さ0.25mを測る。拳大の礫が床面に多くみられたが、性格はわからない。床面から格子目叩きの平瓦と高台付の須恵器が出土した。



第11図 盤石地区2次調査遺構配置図 (1/100)



第12図 盤石地区2次調査2号竪穴住居跡実測図 (1/40)

その他

Ⅱ区のP22、P23で柱痕を確認し、掘立柱建物の柱穴である可能性があるが、調査区が狭小のため断定はできない。

(2) 遺物 (図版6、第14～16図)

土器 (第14、15図36、38)

1～21は1号住居跡から出土した弥生土器で、出土土器のほとんどが細片であり、器壁も磨滅が著しい。1～9は甕の口縁部、10～12は甕の底部、13は壺の底部である。14は甕か壺の底部でやや丸底を呈する。15は袋状口縁壺の口縁部で丹塗りである。16は壺の口縁部で内外面に丹塗りあり。17は

壺の口縁部、18は複合口縁壺の口縁部である。19は壺の頸部で突帯があり、外面に丹塗りがみられる。20は壺の口縁部。21は高杯の口縁部である。22は2号住居跡からの出土で弥生土器の底部細片である。

23～25、27、28は1号土坑出土の弥生土器で、23は甕の口縁部、24は壺の底部で外面はタテ方向のミガキ調整をしている。25は脚付椀か。27は壺の口縁部で、外面の調整はタテ方向のミガキである。28は器台の脚部。

30は弥生土器の壺の口縁部で、P31から出土した。31はP10から出土した。M字突帯のある弥生土器で甕の胴部と思われる。32は甕の口縁部で、遺構検出時に出土した。33～35は攪乱から出土した。33は甕、34は壺の胴部で突帯の間に暗文あり。35は土師器で高杯の脚部である。

36は1号土坑から出土した黒色土器A類（内黒）である。内面にヘラミガキを施す。口径15.2cm。胎土精製。図化していないが、同安窯系青磁椀の口縁部細片も出土している。37は攪乱から出土した須恵器の杯蓋細片である。復元口径は13.6cmを計り、青灰色を呈する。

瓦（第15図37）

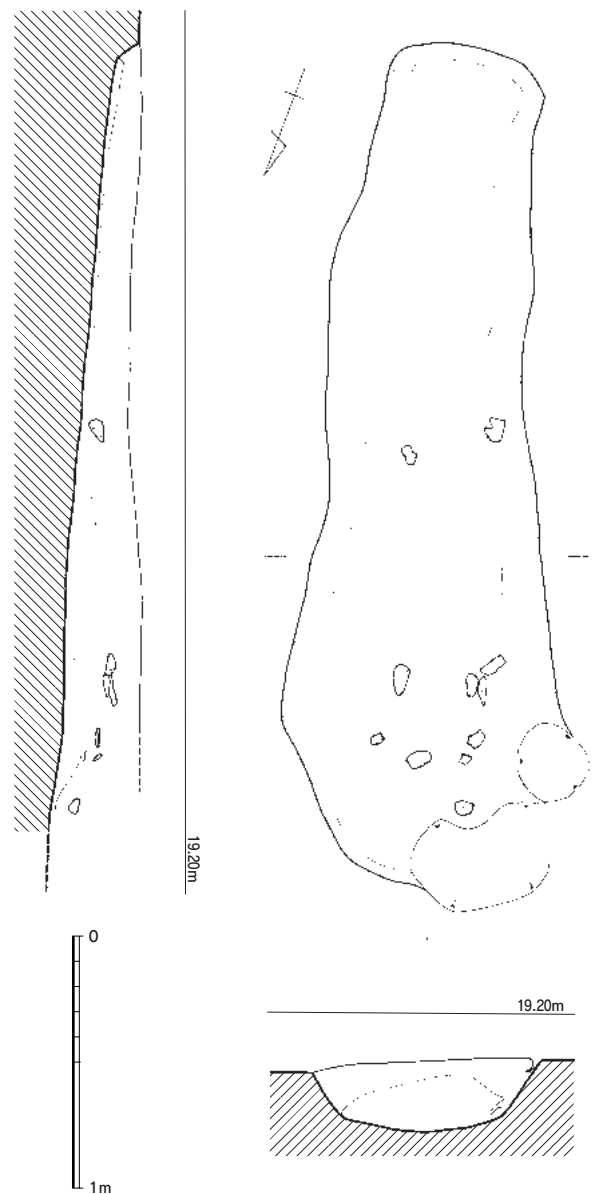
平瓦の細片で1号土坑から出土した。淡灰色を呈し、凸面は格子目の叩きが施される。

青銅器鑄造関連遺物（図版6、第16図39～44）

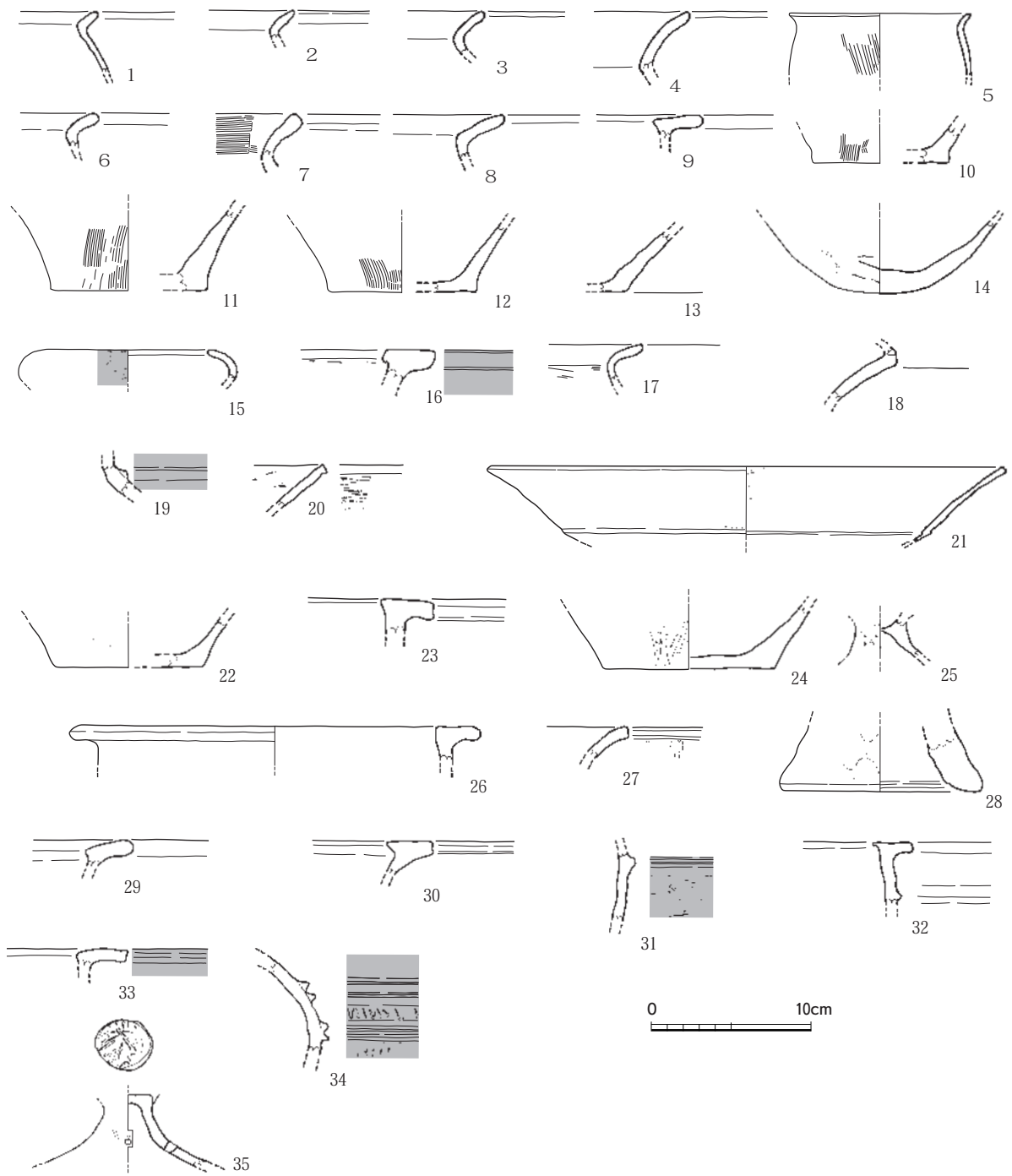
39は2号溝から出土した石英長石斑岩製の砥石片である。本来、鑄型であった可能性もあるが、鑄型として使用された面は確認されない。40はP11から出土した取瓶/坩堝の破片で、小片のため口径等の復元はできない。内面は被熱により青灰色に還元しているが、外面はヨコナデなどの調整が観察できるので、内面ほどの高熱は受けていないと判断される。41～44は真土製銅矛中子である。41は1号住居跡の貼床下層から出土し、扁平率は0.75である。42は1号住居跡の覆土中から出土し、扁平率は0.8である。43は1号住居跡の屋内土坑から出土したもので、屋内土坑からは5点の中子が出土しているが、図示できたのは本例だけである。側面が著しく欠けており、扁平率はわからない。44はP101から出土した。扁平率は0.76である。これらの中子は扁平率からみて、中広形銅矛のものとみられる。

鉄器類（第16図45、46）

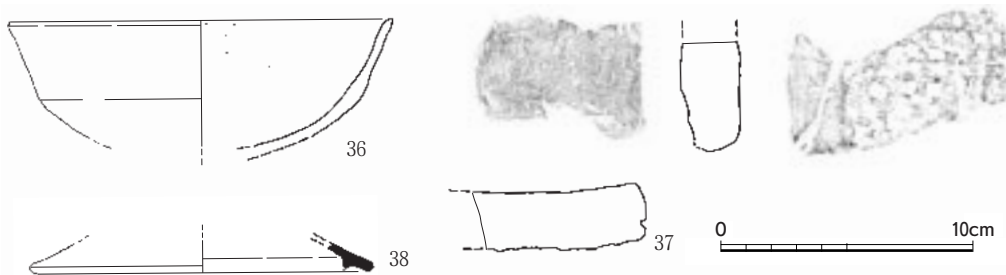
45、46は1号住居跡の屋内土坑から出土した鉄製品である。45は薄い鉄片で三角形に復元され、



第13図 盤石地区2次調査1号土坑実測図（1/30）



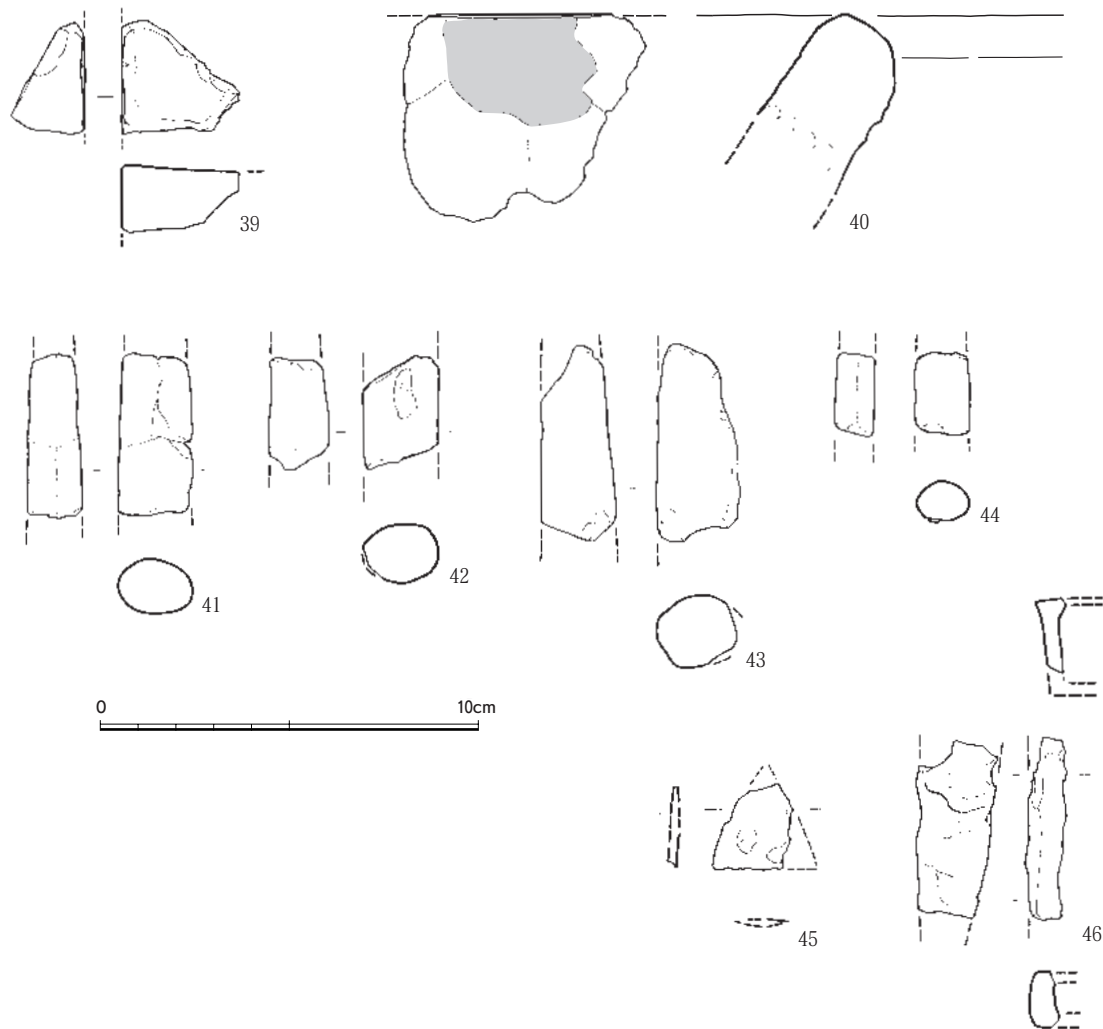
第14図 盤石地区2次調査出土弥生土器実測図 (1/4)



第15図 盤石地区2次調査出土土師器・須恵器・瓦実測図 (1/3)

表2 磐石地区2次調査出土土器観察表

挿図	No.	器種	出土遺構	法量(cm) ①口径②底径 ③胴幅部径	残存度	調整及び特徴	色調	備考
第14図	1	甕	1号住居跡		口縁部細片	器壁の磨滅が著しく調整不明。	淡黄～淡黄褐色	
	2	甕	1号住居跡		口縁部細片	器壁の磨滅が著しいが内外面ともヨコナデ。	黄褐～褐色	
	3	甕	1号住居跡		口縁部細片	内外面ともヨコナデ。胎土は1mm前後の石英、長石、雲母を少し含む。	褐黄色	
	4	甕	1号住居跡		口縁部細片	胎土は1mm以上の石英、長石、雲母を非常に多く含む。器壁の磨滅が著しく調整不明。	黄橙褐色	
	5	甕	1号住居跡	①(11.3)	口縁部細片	胎土は1mm前後の石英、長石、雲母を含む。口縁部はヨコナデ、胴部外面はタテハケ、内面はタテハケ後ナデ。	内面：暗黄褐色 外面：褐色	屋内土坑
	6	甕	1号住居跡		口縁部細片	内外面ともヨコナデ。	黄褐色	
	7	甕	1号住居跡		口縁部細片	胎土は1mm前後の石英、長石、雲母を含む。内面ヨコハケ、外面ヨコナデ。	淡茶褐色	
	8	甕	1号住居跡		口縁部細片	胎土は1mm前後の石英、長石、雲母を多く含む。内外面ヨコナデ。	白灰～淡黄褐色	屋内土坑
	9	甕	1号住居跡		口縁部細片	胎土は砂粒を殆ど含まない。内外面ともヨコナデ。	淡黄褐色	屋内土坑
	10	甕	1号住居跡	②(8.6)	底部を約1/4残存する。	胎土は1mm前後の石英、長石、雲母を含む。外面はタテハケ。内面はナデ。	褐色	
	11	甕	1号住居跡	②(9.8)	底部細片	胎土は1mm前後の石英、長石、雲母を含む。内面はナデ、外面はタテハケ。	内面：暗褐色 外面：橙褐色	
	12	甕	1号住居跡	②(9.2)	底部を約1/5残存する。	底部外面はタテハケ。	内面：黄褐色 外面：褐色	
	13	壺	1号住居跡		底部細片	胎土精製。内面はナデ、外面はタテハケ後ナデ。	内面：褐～暗褐色 外面：橙褐色	
	14	甕	1号住居跡		底部破片	胎土は1mm前後の石英、長石、雲母を多く含む。内面はナデ、外面は底部をナデ、底部から胴部下半にかけてタテハケ。	黄褐色	
15	袋状口縁壺	1号住居跡	①(19.0)	口縁部細片	胎土精製。内外面ともヨコナデ。	内面：黄褐色 外面：朱色	丹塗	
16	壺	1号住居跡		口縁部細片	胎土は1mm前後の石英、長石、雲母、赤色砂粒を多く含む。器壁の磨滅が著しく調整不明。	橙色	丹塗	
17	壺	1号住居跡		口縁部細片	胎土は1mm未満の石英、長石、雲母を少し含む。内外面ともヨコナデ。	黄橙褐色		
18	複合口縁壺	1号住居跡		口縁部細片	内外面ともナデ調整。	黄褐色		
19	壺	1号住居跡		頸部細片	頸部の付け根に突帯あり。胎土は1mm前後の石英、長石、雲母を少し含む。外面ヨコナデ。	黄褐色	丹塗	
20	壺?	1号住居跡		口縁部細片	胎土は1mm未満の石英、長石、雲母を少し含む。外面はヨコハケ、内面はヨコハケ後ナデ。	橙色		
21	高杯	1号住居跡	①(32.4)	口縁部細片	内面はヨコハケ、外面はヨコナデ。口縁端部は沈線状に窪む。	黄橙褐色		
22	甕	2号住居跡		底部を約1/4残存する。	胎土は1mm前後の石英、長石、雲母を含む。内外面ともハケ調整後ナデ。	内面：淡黄灰色 外面：暗褐色		
23	甕	1号土坑		口縁部細片	口縁端部の中央が窪む。胎土は1～4mm前後の石英、長石、雲母を非常に多く含む。器壁の磨滅が著しく調整不明。	黄褐色		
24	壺	1号土坑		底部を約1/4残存する。	胎土は1mm前後の石英、長石、雲母を含む。外面はミガキ。底部外面に黒斑あり。	黄褐色		
25	脚付腕?	1号土坑		脚部細片	胎土は1mm未満の石英、長石、雲母を含む。脚部外面はミガキ。	黄橙褐色		
26	甕	1号土坑		口縁部細片	1mm前後の石英、長石、雲母を含む。内外面ともヨコナデ。	橙褐色		
27	壺	1号土坑		口縁部細片	胎土は1mm前後の石英、長石、雲母を含む。内外面ともヨコナデ。口縁端部が沈線状に窪む。	褐色		
28	器台	1号土坑	③(12.7)	脚部細片	胎土は1～3mm前後の石英、長石、雲母を含む。内外面ともナデ。	内面：黄褐色 外面：橙褐色		
29	高杯?	3号土坑		口縁部細片	胎土は1mm未満の石英、長石、雲母を少し含む。器壁の磨滅が著しく調整不明。	黄褐色		
30	壺	P3		口縁部細片	胎土は1mm以上の石英、長石、雲母を含む。器壁の磨滅が著しく調整不明。	橙色		
31	甕?	P10		胴部細片	M字突帯あり。外面はヨコナデ。胎土精製。	内面：淡黄灰色 外面：橙褐色	丹塗	
32	甕	遺構検出時		口縁部細片	口縁部の下に三角形の突帯が付く。口縁部は内外面ともヨコナデ。胎土は1mm以下の石英、長石、雲母を含む。	黄褐色		
33	甕	攪乱		口縁部細片	口縁端部の中央が窪む。胎土は1mm前後の石英、長石、雲母を少し含む。器壁の磨滅が著しく調整不明。	明褐色	丹塗	
34	壺	攪乱		胴部破片	M字突帯が2条ある。突帯の上部はヘラミガキ。突帯間と下部に暗文あり。胎土精製。	明褐色	丹塗	
35	高杯	攪乱		脚部破片	脚部に穿孔あり。外面はタテハケあり。杯部との接合面は放射線状に溝を入れている。胎土は1mm以下の石英、長石、雲母を含む。	黄褐色		
第15図	36	丸底杯	1号土坑	①15.2	底部を欠損	内面は口縁から胴部にかけてヘラミガキ、底面と外面はヨコナデ。胎土は1mm前後の石英、長石、雲母を含む。	内面：黒色 外面：淡黄褐色	黒色土器
	38	杯蓋	攪乱	①13.6	口縁部細片	砂粒をほとんど含まない。	青灰色	



第16図 盤石地区2次調査出土鑄造関連遺物・鉄器実測図（1/2）

無茎鎌か鑿切りされた三角鉄片のいずれかだと考えられる。46は鑄造鉄斧の側面部片である。鑿などに再加工された痕跡は認められない。鉄素材の性格も考えておきたい。

(3) 小 結

1号竪穴住居跡では焼土がみられ鑄型石材が出土し、屋内土坑からも焼土が出土し、5点の銅矛中子や鉄斧片が出土した。また、隣接するP11から取瓶/坩堝片が出土していることを併せて考えると、1号竪穴住居跡は青銅器鑄造に関連した工房の可能性もある。また、鉄斧は断面梯形に復元され、三角鉄片とも捉えられる鉄片が出土しており、あくまで可能性にとどまるが鉄器鍛造も同時に行われたとも想定される。鉄器鍛造については今後の鉄器生産研究の進展を待ちたい。

また、攪乱の中からではあるが、7世紀後半～末の須恵器杯蓋片が出土している。須玖岡本遺跡内には百済系単弁軒丸瓦が数点出土し、建物跡も確認されているが、時期を示す遺物が出土していない。これまでの調査でも該期の須恵器が出土していなかっただけに、当遺跡内における百済系単弁軒丸瓦の時期を示唆するもので、今後の調査に期待される。

3 岡本山地区6次調査

調査地点は春日丘陵北側先端の高所にあり、標高は34m前後を測る。調査地点から北西150mの位置には王墓地点があり、地形的には王墓地点より高い位置にある。また、南西には甕棺墓群及び小銅鐸鑄型が検出された岡本山地区1次調査地点（旧岡本4丁目遺跡）がある。

今回の調査は国県補助による重要遺跡確認調査であり、岡本公園ならびに熊野神社境内に遺構があるのか、ある場合はどのような遺構であるのかを確認することを目的とした。平成14年1月18日から平成14年3月8日まで調査を行い、調査終了後は埋め戻して保存を行った。

対象地のうち岡本公園部分は、戦前に土取りにより数m程削られているとのことである。太平洋戦争中においては高射砲が設置されていたとの記録があることから、地形的に高台であり、周囲を見渡すには好い所であったと思われる。現在は忠霊塔が設置されている。このような状況であったことから、公園部分の遺構の残存状況はよくない。

(1) 遺 構

対象地内にて16ヵ所にトレンチを設定し、検出した遺構は甕棺墓、溝、古墳周溝であり、各トレンチの検出状況は以下のとおりである。

Aトレンチ（図版7-1、第18図）

対象地公園部分の東側に南北方向のトレンチを設定した。対象地は削平されているため現地表面から深さ約5cmで赤褐色粘質土の地山に達した。また、トレンチ内の一部で重機の爪跡がみられた。遺構は確認されていない。

Bトレンチ（図版7-3、第19図）

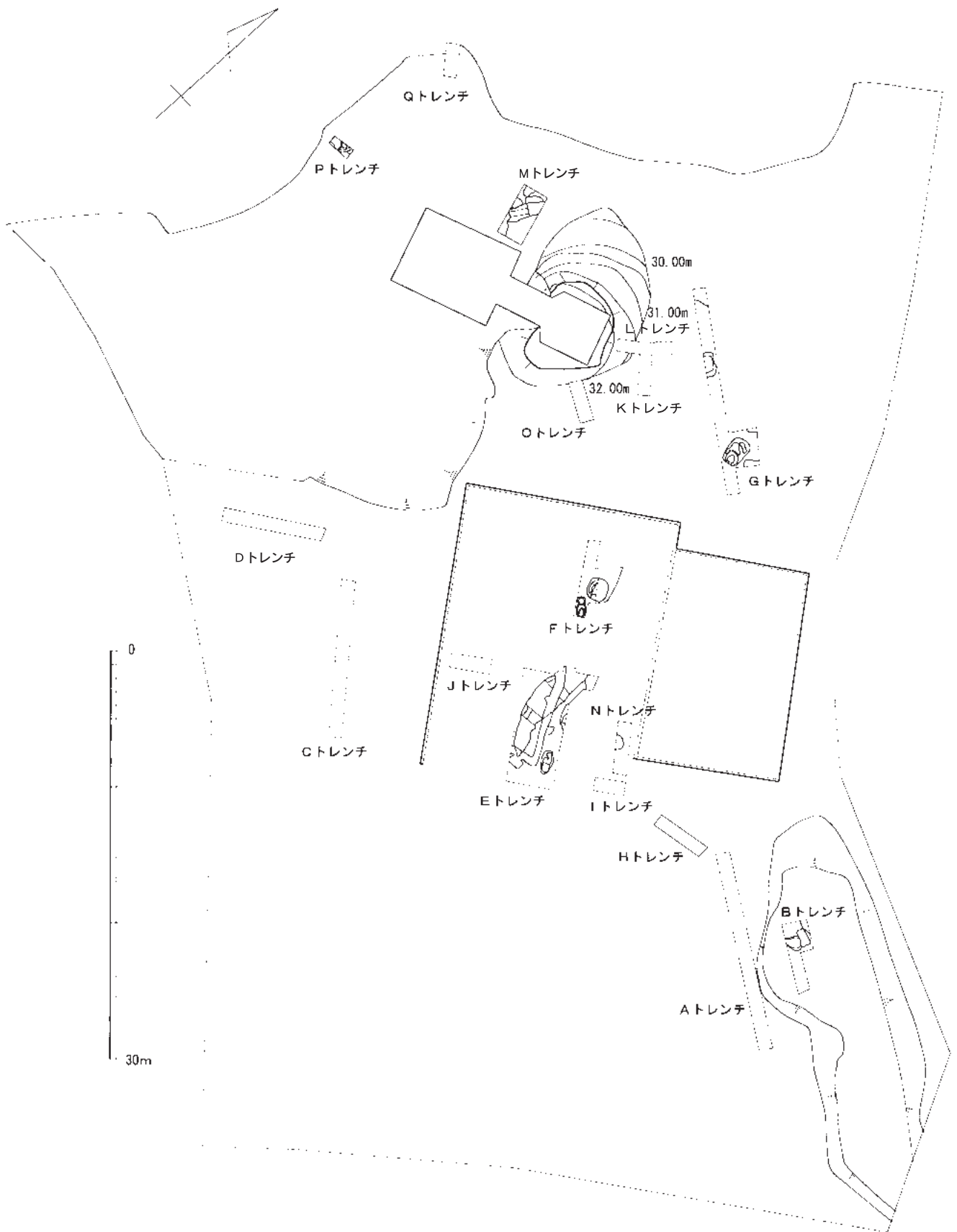
対象地公園の南東部で、Aトレンチ設定した公園グラウンド面より約1m高い。当初、削平されていないと思われたが、削られたバイラン土が盛られており、結果的に公園全体が削平されていたことがわかった。トレンチ内では一部遺構、遺物を確認した。遺構の性格は不明である。

Cトレンチ（第18図）

対象地公園部分の西側に南北方向のトレンチを設定した。Cトレンチ個所においても削平されており、地山の花崗岩風化バイラン土の走向線がみられた。試掘溝では切り崩されたバイラン土が堆積し、現地表面から深さ約20cmで地山が達した。地山の直上には碎石が敷かれていた。遺構、遺物とも検出されなかった。

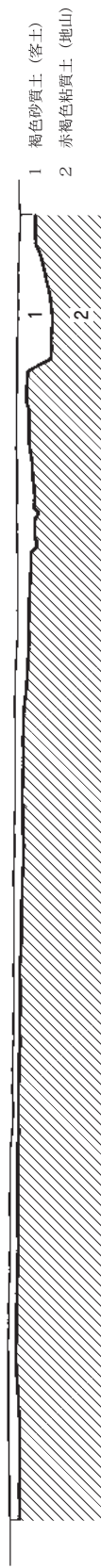
Dトレンチ（図版7-2、第23図）

対象地公園の西北部で東西方向に設定した。トレンチは赤褐色の真砂土が堆積し、これを除去すると現地表面から東側で約30cm、西側で約70cmの深さで地山に達した。トレンチ内からは遺構は確認されなかったが、客土の真砂土内から石戈が出土した。



第17図 岡本山地区6次調査遺構配置図 (1/400)

Aトレンチ



Cトレンチ

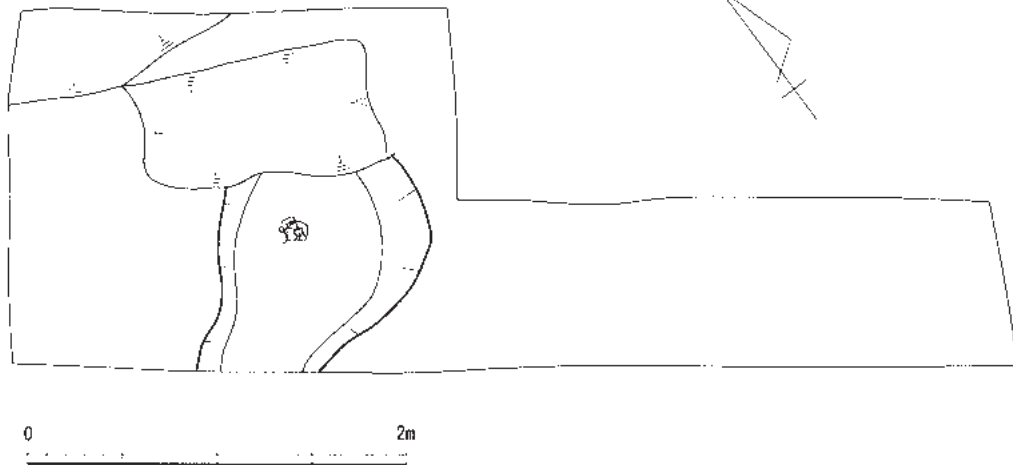


Gトレンチ

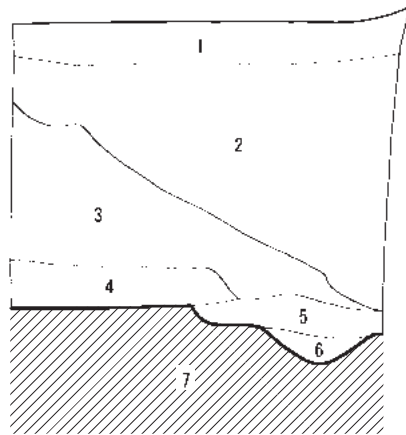
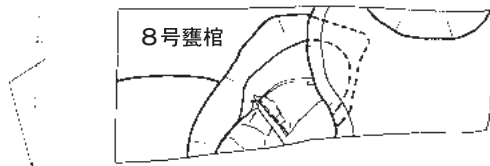


第18図 岡本山地区6次調査A・Cトレンチ土層断面実測図及びGトレンチ遺構実測図 (1/40)

B トレンチ



P トレンチ



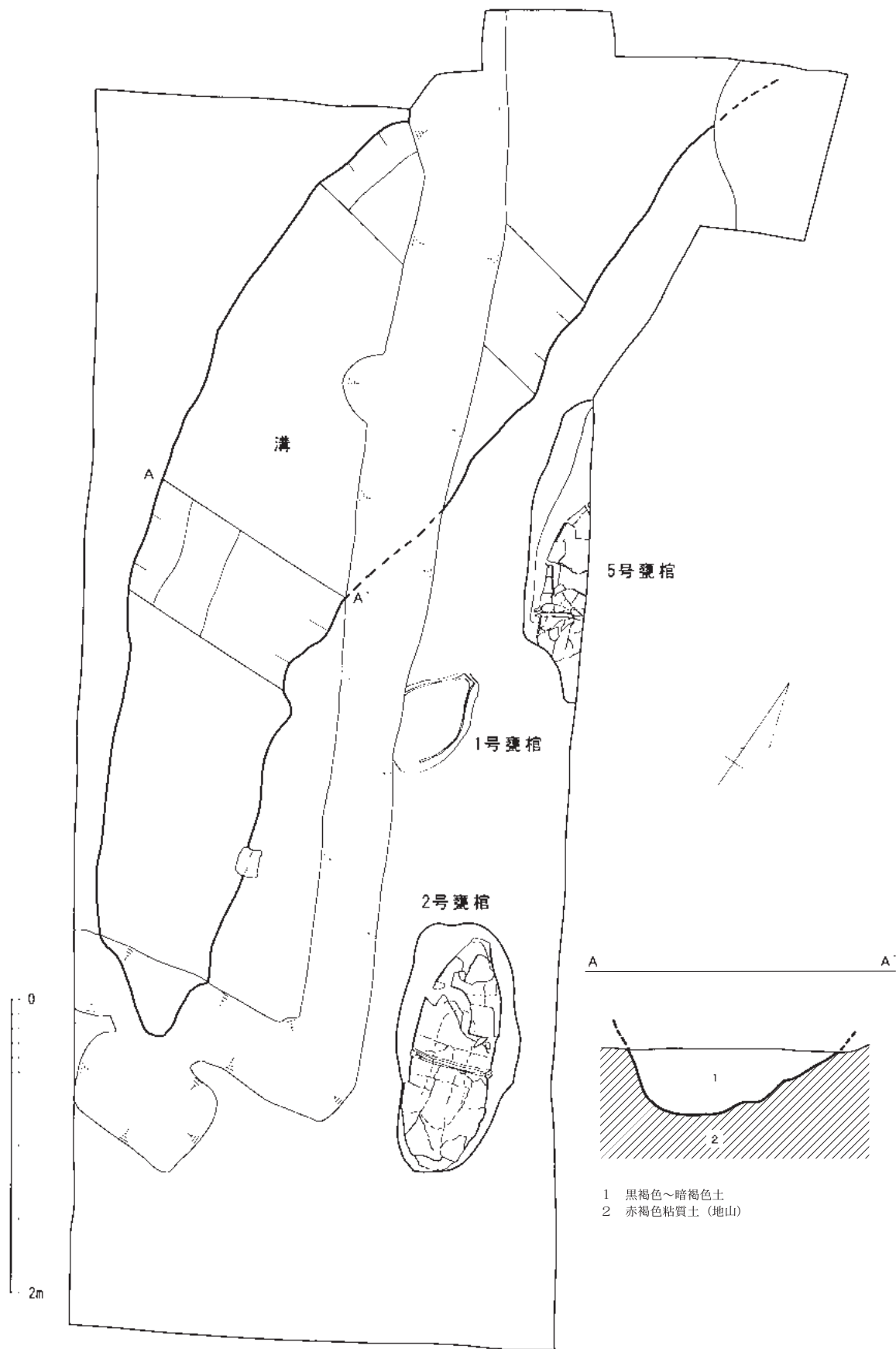
- 1 褐色土+黒色粘質土
- 2 黄褐色砂質土 (真砂土)
- 3 褐色土 (橙褐色土ブロック混)
- 4 褐色土
- 5 暗褐色土+褐色土
- 6 黒褐色土
- 7 地山

第19図 岡本山地区6次調査B・Pトレンチ遺構実測図及び土層断面実測図 (1/40)

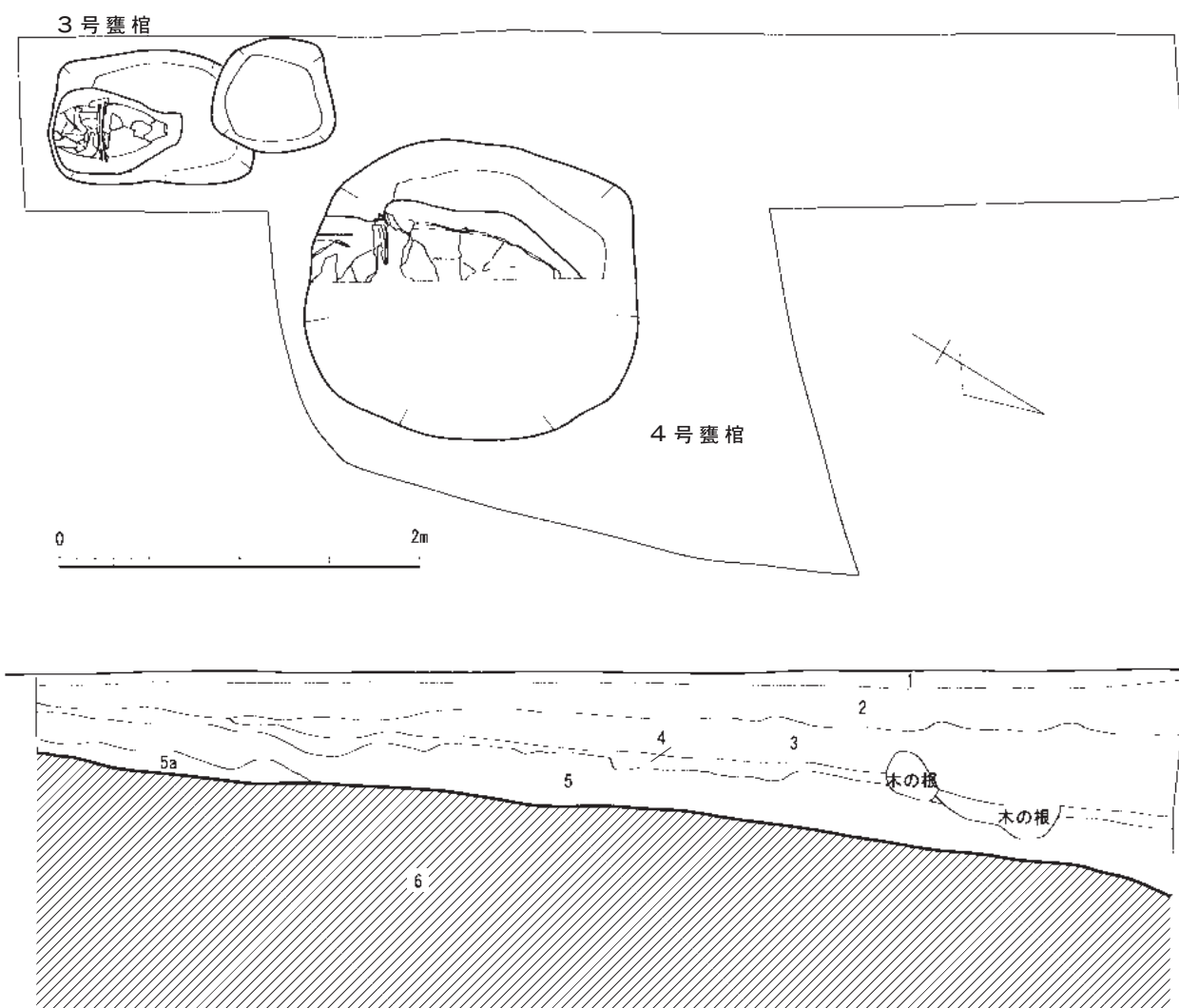
E トレンチ (図版8、第20・24図)

対象地公園部分のほぼ中央にトレンチを設定した。壙棺墓の棺底部分がわずかに残存しており、成人棺2基と小児棺1基、溝1条を検出した。溝は最大幅3.2m、深さ30~40cmで、やや弧を描きながら南北方向に延びる。断面の形状は西側が急な角度で立ち上がるのに対し、東側は緩やかに立ち上がる。壙棺墓は溝の東側で確認した。

1号壙棺墓は墓坑が削平され、長軸0.8m程の残存である。中型の壙を埋葬容器として使用。現地保存のため、平面確認をしたのみで掘削していない。2号壙棺墓は墓坑が削平されていた。大型壙の



第20図 岡本山地区6次調査Eトレンチ遺構実測図及び土層断面実測図 (1/40)



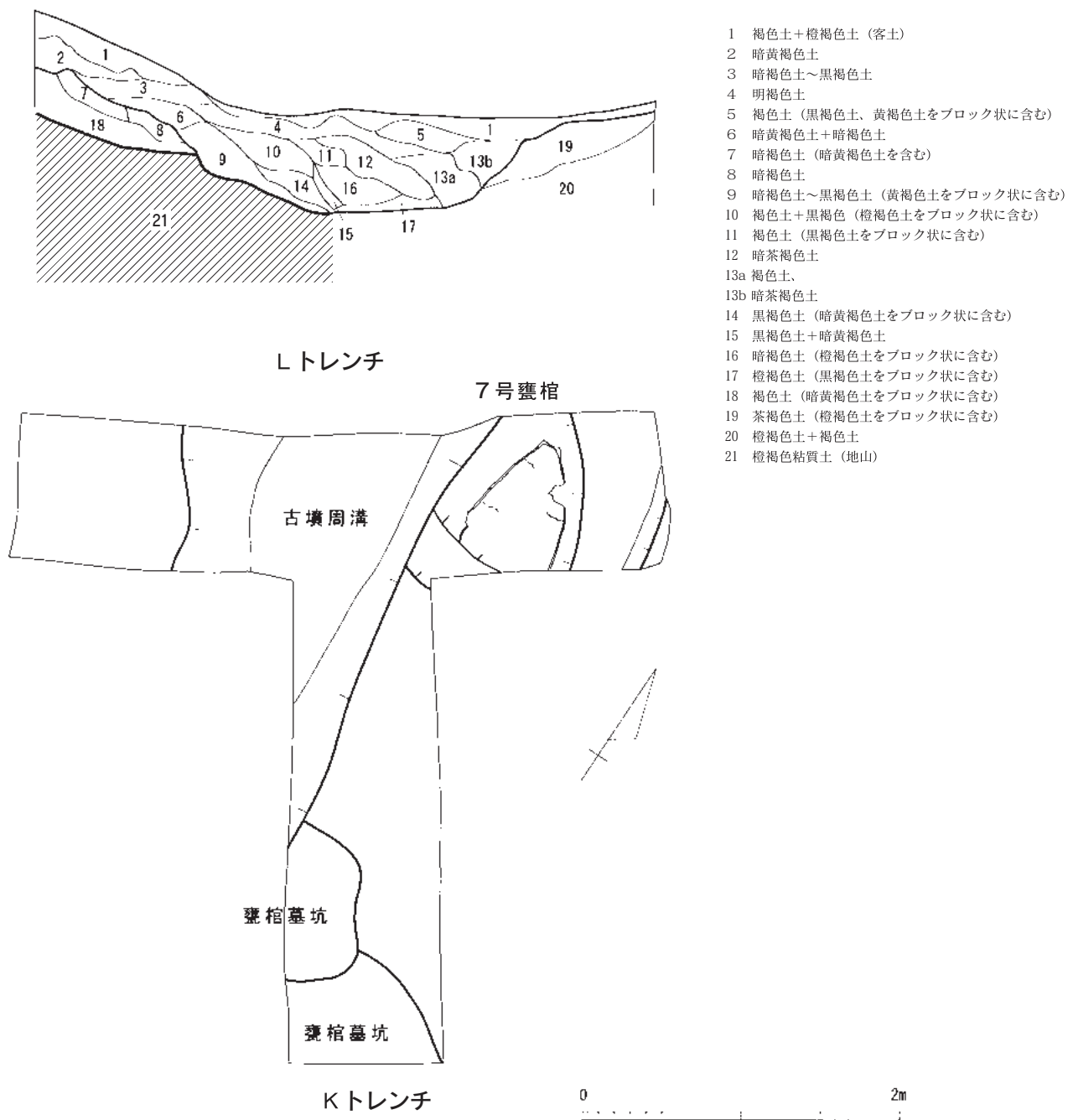
- 1 黄灰褐色砂層（真砂土）
- 2 赤褐色土+暗褐色土+白色粘質土
- 3 暗褐色土（赤褐色土をブロック状に含む）
- 4 黒褐色土（旧表土）
- 5 明黄褐色土
- 5a 褐色土
- 6 赤褐色粘質土

第21図 岡本山地区6次調査Fトレンチ遺構実測図及び土層断面実測図（1/40）

接口式甕棺墓で、ほぼ水平に埋置されていた。5号甕棺墓は植樹があり、トレンチを拡張できなかったため、部分的な掘削に留まった。甕棺墓の時期を確認後、埋め戻して、現地保存した。中型甕の接口式甕棺で、ほぼ水平に埋置されていた。

Fトレンチ（第21・25図）

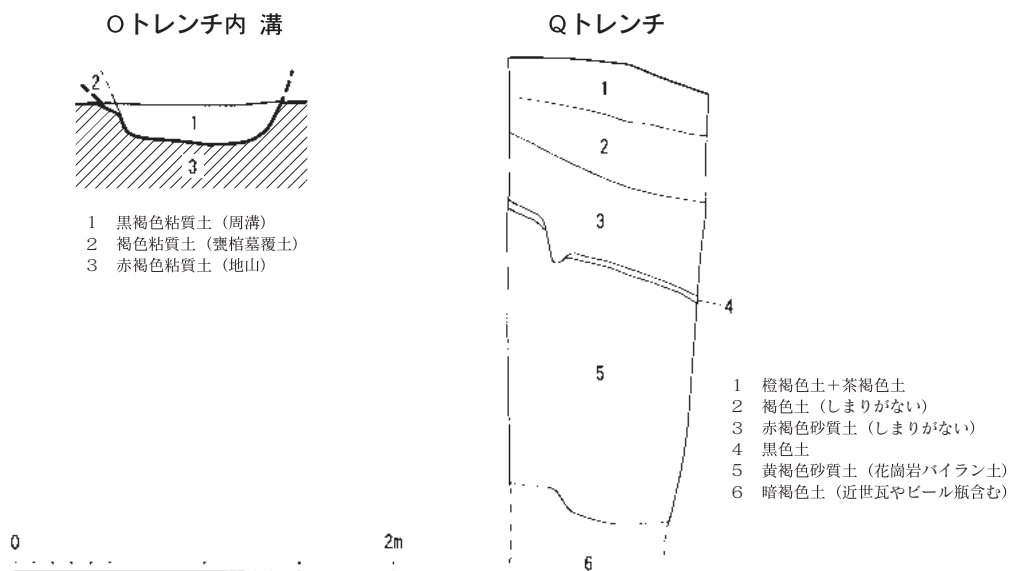
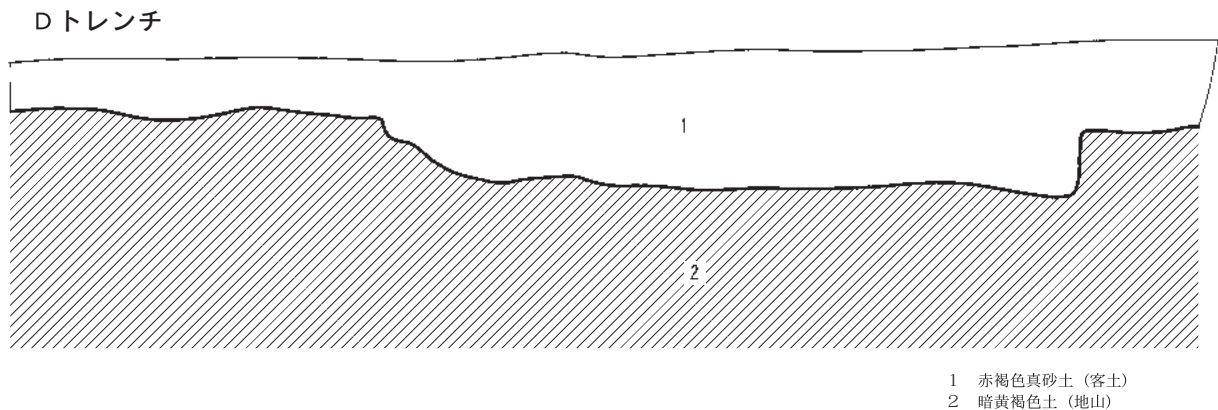
対象地公園部分の北部に設定した。地域住民の話によると公園の地形は今よりも2～3m高く、削平した土を神社側に盛ったとのことであるが、この話のとおりFトレンチの土層断面では旧表土の上にバイラン土の堆積がみられた。当初、遺構検出時に甕棺らしい遺構があったので東側を拡張したと



第22図 岡本山地区6次調査K・Lトレンチ遺構実測図及び土層断面実測図 (1/40)

ころ、成人棺1基と小児棺1基を検出した。

3号甕棺墓は長方形の墓坑で長軸1.09m、短軸0.66mを測る。小型の甕を埋葬容器として使用。記録作成後、埋め戻して現地保存した。4号甕棺墓は墓坑が楕円形の平面プランを呈し、埋め土であったため当初より甕棺墓と想定し、半截して掘削した。大型甕の接口式甕棺墓で、口縁部を粘土で被覆していた。ほぼ水平に埋置され、下甕は横穴に半分程挿入されている。記録作成後、埋め戻して現地



第23図 岡本山地区6次調査D・O・Qトレンチ遺構実測図及び土層断面実測図 (1/40)

保存した。

Gトレンチ (図版9-1、第18・24図)

対象地における旧地形を確認するため、熊野神社本殿の東側で南北方向に設定した。南から北へ緩やかに傾斜していることを確認し、トレンチ内の南部では成人棺1基を検出した。成人棺の東には小児棺と思われる墓坑を検出したが遺構面の検出のみで発掘していない。

6号甕棺墓の墓坑は長軸2.13m、短軸1.45mを測る。大型の甕同士の接口式甕棺墓で、ほぼ水平に埋置される。棺内に土砂が流入していなかったため、副葬品の有無を確認したが、何もなかった。記録作成後、埋め戻して現地保存した。

H・I・Jトレンチ（図版9-2・3・10-1）

対象地公園部分の北部でH・Iトレンチは忠霊塔の南側、Jトレンチは西側に設定した。いずれも遺構・遺物は確認されなかった。

K・Lトレンチ（図版10-3、第22図）

熊野神社本殿東側に設定した。南北方向がKトレンチ、東西方向がLトレンチである。古墳周溝、7号甕棺墓、掘削はしていないが、甕棺墓と考えられる墓坑を2基検出した。古墳の墳丘及び主体部は神社本殿下にあり、周溝は幅約1.5m、深さ約40cmである。

7号甕棺墓は円墳の周溝に切られていたため、完掘はしていない。中型の甕を埋葬容器として使用した単棺。

Mトレンチ（図版10-2・4）

熊野神社拝殿北側に設定した。現在、奴国の丘歴史公園内に置かれている王墓の上石が、以前置かれていた場所である。K・Lトレンチで検出された同一古墳の周溝が確認されている。

Oトレンチ（第23図）

熊野神社本殿の南東側に設定した。K・L・Mトレンチと同一古墳の周溝の続きが確認された。周溝の幅は85cm、深さ20cmを測る。

Pトレンチ（図版11-2・3、第19図）

熊野神社の北側の地形が北側道路との比高差が約3mあり、急な傾斜となっており地形的に不自然と思われたので、P・Qトレンチを設定した。Pトレンチを設定した熊野神社拝殿西側斜面は、以前はここが熊野神社への進入路となっており、拝殿の前面に鳥居があった。Pトレンチからは現地表面から深さ約1.5mで小児棺を検出した。

8号甕棺墓は楕円形の掘方で、小型の甕を埋葬容器として使用し、ほぼ水平に埋置されていた。

Qトレンチ（図版11-4、第23図）

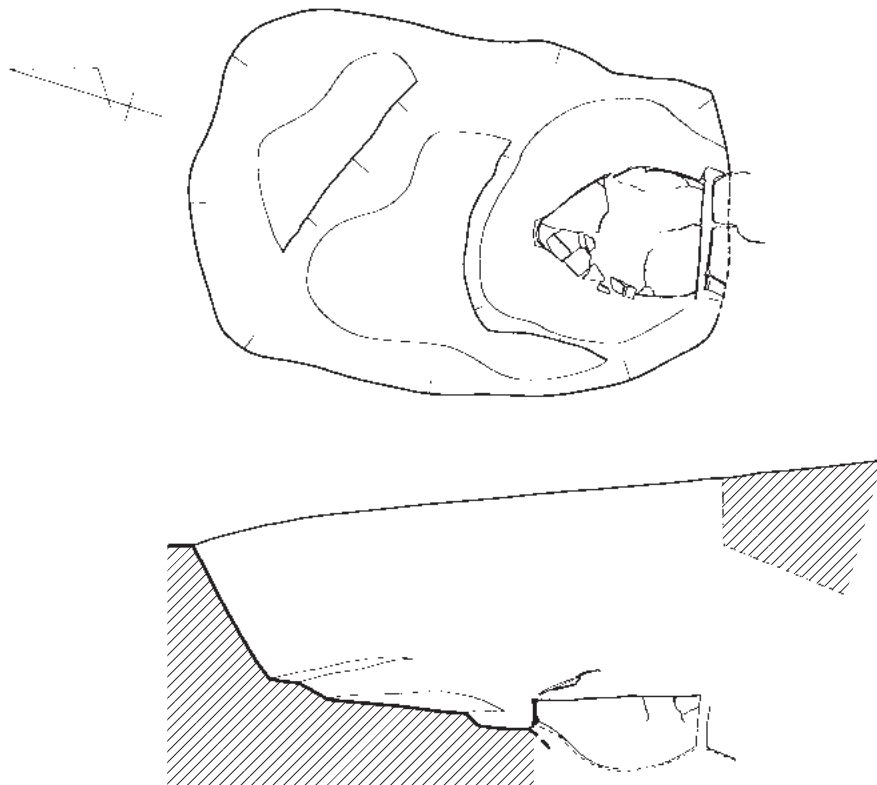
熊野神社北側の鳥居のある階段西側に設定した。Qトレンチでは現代の造成の跡が2回確認された。現地表面から深さ約80cm～1mは旧公民館建設時の造成で、その下の花崗岩風化バイラン土の堆積は現岡本公園の地形削平時に盛土されたものである。トレンチは現地表面から深さ約1.5mまで掘削したが、崩落の危険がありこれ以上掘削しなかったため遺構の有無は不明である。

(2) 遺物（図版12、13、第26～32図）

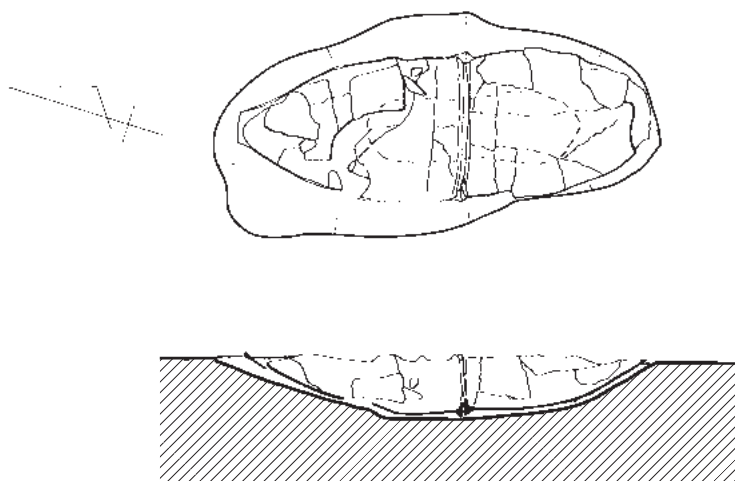
甕棺（図版12、第26図1～6・第27図7、8）

1はFトレンチ出土の4号甕棺の上甕である。口縁部はT字形を呈し内側に突出する。復元口径は67.2cmを計る。胎土は長石、石英を含み、黄褐色を呈する。2はMトレンチ出土の7号甕棺の上甕である。口縁部はT字形を呈し内側に大きく突出し、平坦面が傾斜する。胎土は石英、長石を多く含み、淡黄褐色を呈する。復元口径は69.4cm。3はGトレンチ出土の6号甕棺上甕である。胴部上半に最大径があり三角突帯を一条めぐらす。口縁部の内側に突出した部分を打ち欠いている。胎土は石

6号甕棺



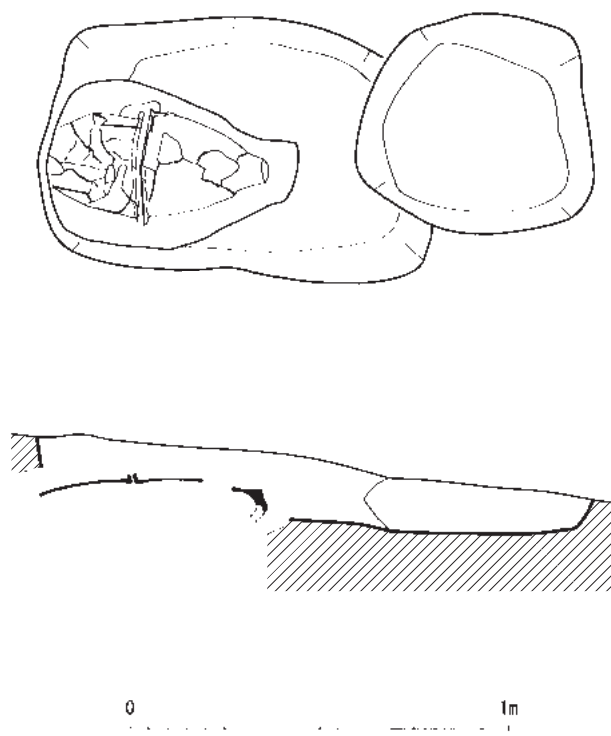
2号甕棺



0 2m

第24図 岡本山地区6次調査2・6号甕棺墓実測図 (1/30)

英、長石を多く含み、淡黄褐色を呈する。復元口径は47.7cmを計る。4は6号甕棺下甕である。上甕とほぼ同様に、復元口径は49.0cm。8はPトレンチ出土の8号甕棺上甕である。口縁部が逆「L」字形で胴部外面はタテハケ、内面はナデ調整である。胎土は1mm未満の石英、長石、雲母を多く含み、黄褐色を呈する。復元口径は29.8cm。5はEトレンチ出土の2号甕棺上甕である。口縁部はT字形で外側に小さく内側に大きく突出し、口縁部に最大口径がある。胴部に三角突帯を一条



第25図 岡本山地区6次調査3号甕棺墓実測図(1/20)

めぐらす。胎土は長石、石英を含み、内面が橙褐色、外面が淡黄褐色を呈する。6は2号甕棺下甕である。上甕とほぼ同様に、復元口径は62.6cm。

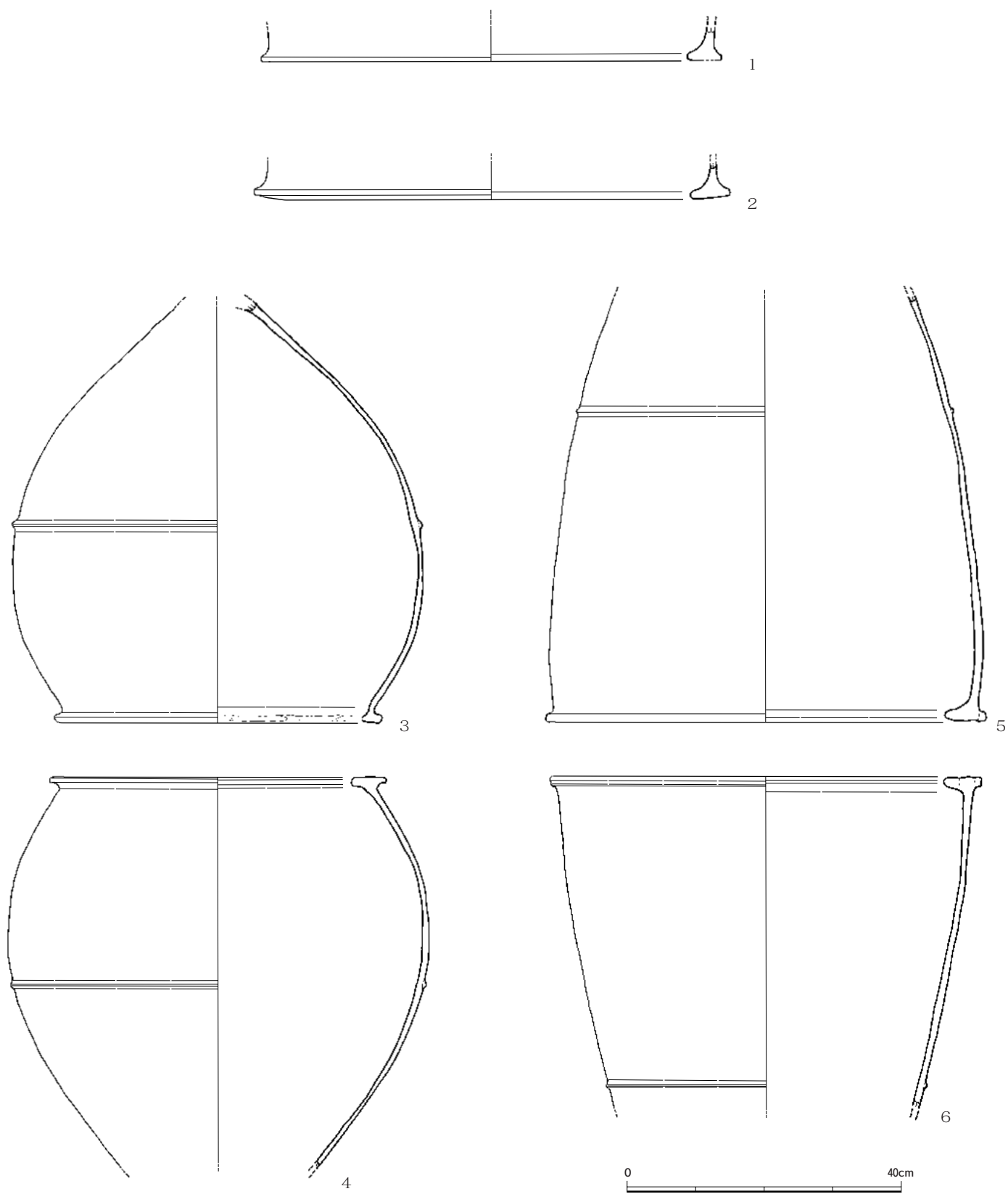
7、8はFトレンチ出土の小児棺の上甕である。底部から胴部下部にかけての破片で、胴部外面はタテハケ、内面はナデ調整を施す。胎土は長石を多く含み、黄褐色を呈する。底径は6.9cm。

弥生土器（図版13、第28図9～16）

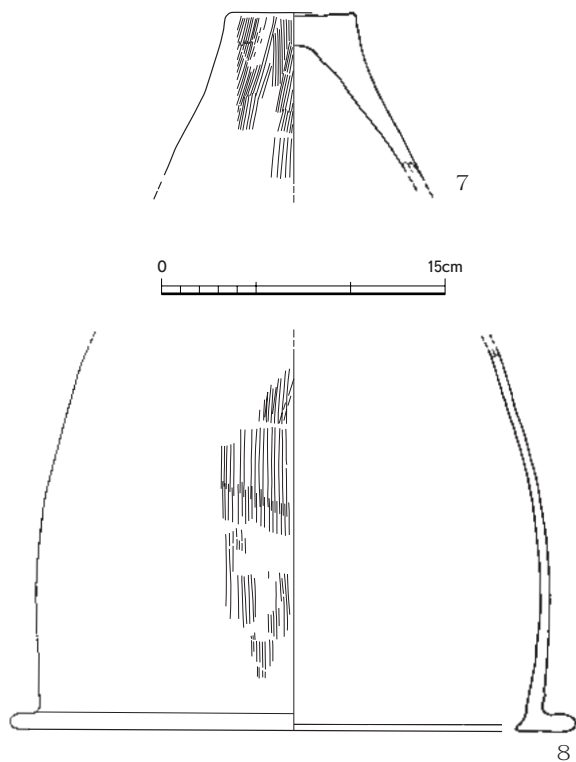
9はBトレンチから出土した。甕の底部細片で、胎土は1～2mm前後の石英長石、雲母を多く含む。黄褐色を呈する。10はEトレンチの溝状遺構から出土した。甕の底部で、胎土は1mm前後の石英、長石、雲母を少し含む。黄橙色を呈し、底径は9.4cmを計る。11、12、15、16はMトレンチ出土である。11、12は高杯で、11の胎土は1mm前後の石英、長石、雲母、赤色細粒を多く含み、橙褐色を呈する。僅かに丹塗痕がある。脚部外面はミガキ調整。12は胎土精製で砂粒をほとんど含まない。15は底部破片で、器種は甕か。胎土は1mm未満の石英、長石、雲母を多く含み、橙褐色である。16は器台の脚部細片である。13はLトレンチから出土した。器台の破片である。14はPトレンチの包含層から出土した。甕の口縁部細片で、胎土は1mm未満の石英、長石、雲母、赤色細粒を含む。淡黄褐色を呈する。

土師器・須恵器（第29図17～23）

17、18は土師器の小皿で、17はGトレンチから出土した。底部細片で、糸切り痕あり。18はMトレンチから出土した。この他、図化していない細片もあり、少なくとも7個体以上あるがすべて糸



第26図 岡本山地区6次調査出土甕棺実測図 (1/8)



第27図 岡本山地区6次調査出土小児棺実測図(1/4)

切り底である。土師器の小皿で、19~23は須恵器で、19~21は甕の胴部の破片である。外面は擬格子目叩きで、内面は19、20が平行当て具、21はナデ調整である。Gトレンチ出土。22はPトレンチ出土で長頸壺の胴部破片である。23はMトレンチ古墳周溝内出土で、杯身の口縁部細片である。

瓦(第30図24~32)

24は丸瓦でBトレンチから出土した。凹面に布目圧痕あり。25、26はFトレンチから出土した。25は平瓦の細片。凸面は格子目の叩き。27~30はGトレンチから出土した。27、29、30は平瓦で凹面に布目圧痕、凸面に斜格子目の叩きがある。淡黄褐色を呈する。28は丸瓦の細片で、凹面に布目圧痕あり。淡褐色を呈する。31は平瓦で、Lトレンチから出土した。凸面に格子目の叩きがある。32は丸瓦で、

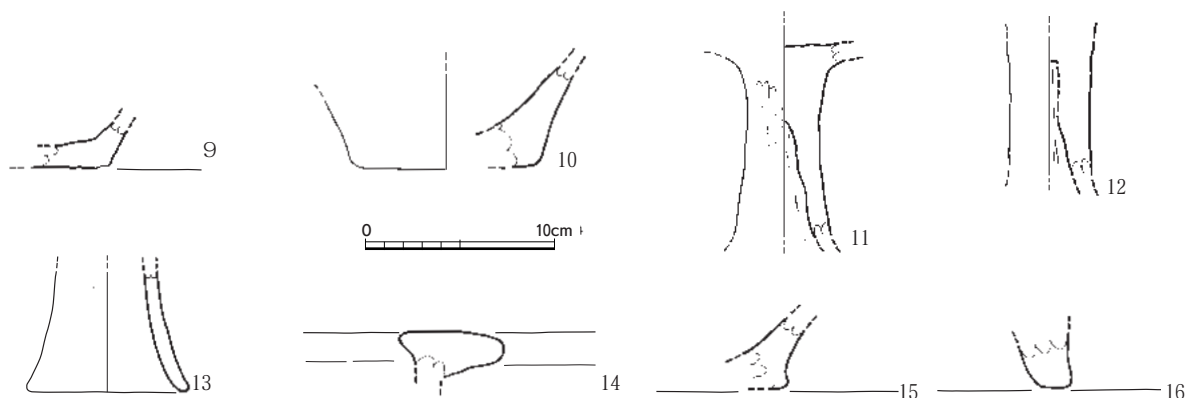
Oトレンチから出土した。凹面は布目圧痕と竹状模骨痕があり凸面の調整はナデで、暗灰色を呈する。

陶磁器(第31図33~35)

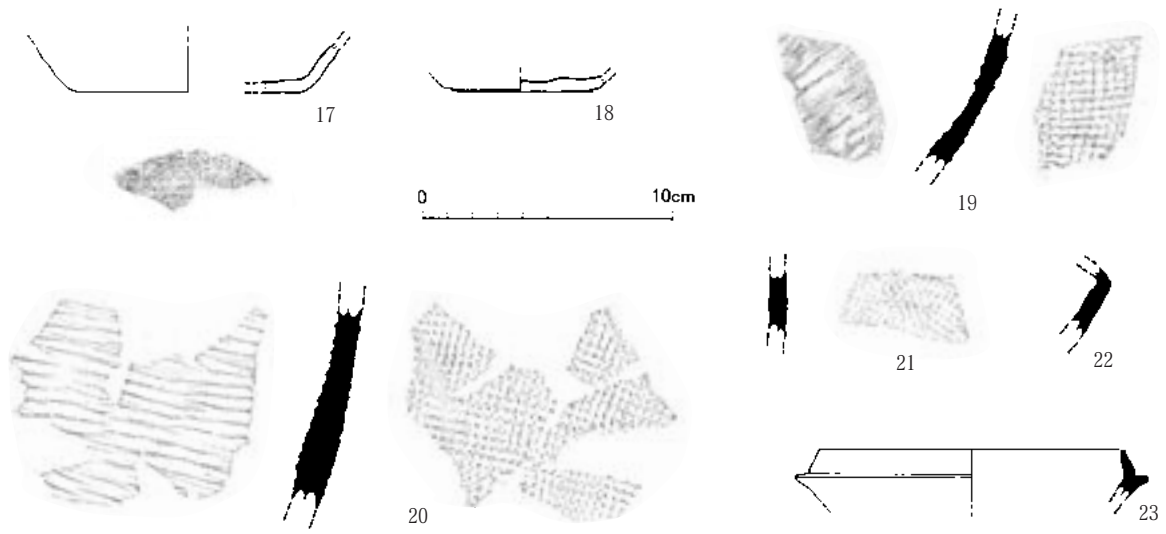
34は碗の口縁部細片で、胎土は灰色、釉は黄色味を帯びた緑色を呈する。内面に櫛目文がある。33、35は国産の陶器である。33は内面見込みと高台端部の釉を掻き取る。胎土は淡褐色で、釉は灰黄色を呈する。35は小型の碗で、胎土は淡灰黄色、釉は非常に薄く黄灰色を呈し貫入が細かい。高台端部は釉を掻き取る。

石器(図版13、第32図36~39)

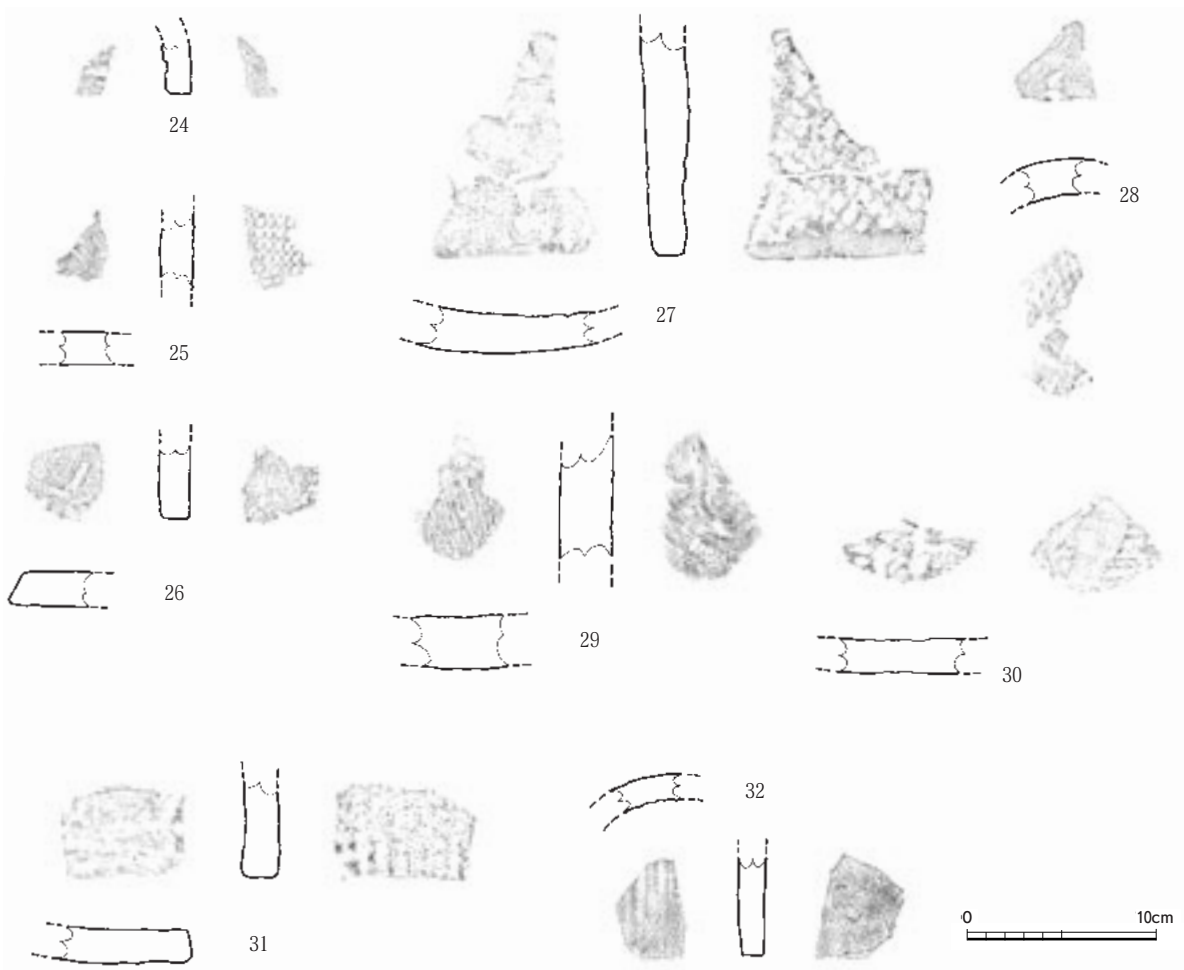
36~38はGトレンチから出土した。36、37は砥石の破片で、36は現存長8.4×6.9cmを計る。



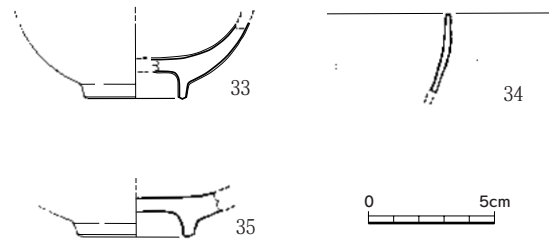
第28図 岡本山地区6次調査出土弥生土器実測図(1/4)



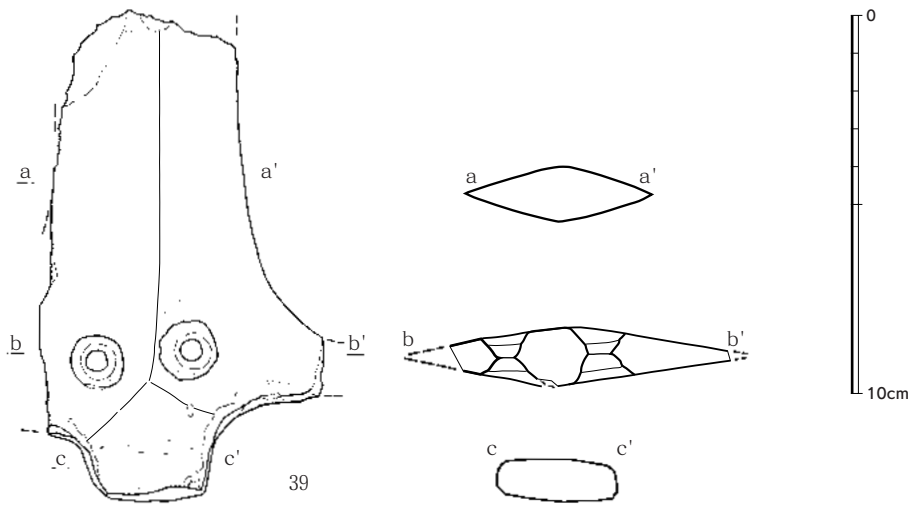
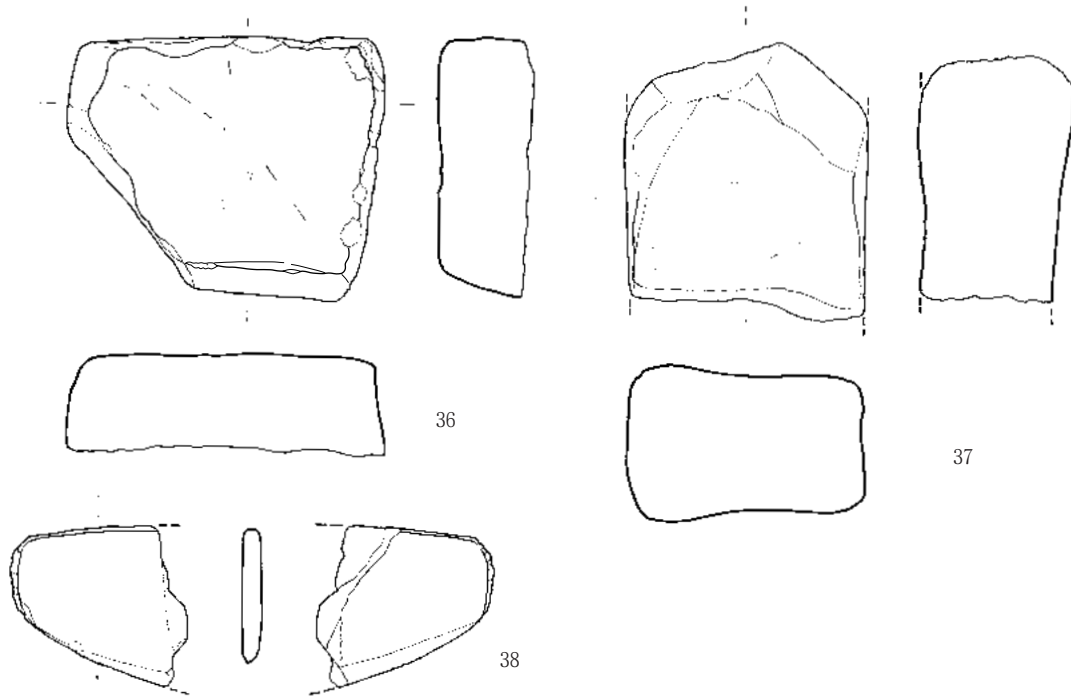
第29図 岡本山地区6次調査出土須恵器・土師器実測図 (1/3)



第30図 岡本山地区6次調査出土瓦実測図 (1/4)



第31図 岡本山地区6次調査出土陶磁器実測図 (1/3)



第32図 岡本山地区6次調査出土石器実測図 (1/2)

淡黄灰色を呈する。37は現存長6.5×7.5cm、厚さ4.2cmを計る。砂岩製。38は石庖丁で、厚さ0.6cmを計る。破片であるが背が直線的で、最大厚は孔～刃部間にある。39は石戈で、残存長13.0cm、残存幅7.6cm、最大厚は穿孔部分にあり1.7cmを計る。穿孔は両割りで、穿孔部の表面に近い部分は敲打痕、中心に近い部分は研磨痕がみられることから、穿孔する際に敲打→研磨という過程が考えられる。また、胡から内にかけての側面の調整は敲打後研磨している。輝緑凝灰岩製か。

(3) 小 結

この調査は、熊野神社境内地と岡本公園の国指定史跡指定に先立つ、重要遺跡確認調査であった。結果として、岡本公園北端部付近から熊野神社境内地内にかけて、弥生時代の甕棺墓が営まれ、また、熊野神社拝殿の下には、6世紀後半頃築造されたとみられる直径10m程度の円墳が1基あることが確認された。また、地形的にはG・Pトレンチで旧地形が確認され、熊野神社北側の盤石地区1次調査地点に連続することが確認された。その他にも、遺構に伴わないが7世紀後半～8世紀初頭に比定される百済系単弁軒丸瓦に伴う丸瓦・平瓦片が出土し、東隣する盤石地区5次調査で確認された建物が、西側に広がる様相も窺えた。

さて、今回検出された弥生時代の甕棺墓は、時期は全て春日市編年のⅢ-3期（中期前半）のものである。特筆されるのはEトレンチ甕棺墓群の西側で、平面形がやや弧を描く溝が1条検出されたことである。この溝からは中期前半の甕の底部が出土し、甕棺墓と同時期であること、そして横断面形が西側に急傾斜で立ち上がり、東側が比較的緩やかに立ち上がるという墳丘墓の周溝にみられる特徴を備えていること、溝の西側には墳墓が1基も見られないことから、この溝は墳墓を区画する溝だと考えられる。当地はかなり削平を受けていたため、上部構造がどうなっていたか特定はできないが、墳丘を伴っていたであろうと推測される。検出された周溝の続き、あるいは直交する周溝を確認するためトレンチを設定したが、いずれのトレンチでも確認できなかったため、この墳丘墓の規模を具体的に掴むことはできなかった。当地は平成14年度に国指定史跡となったので、将来的には墳丘墓の全貌や墳墓の数を把握することもできよう。

圖 版



1 岡本地区11次調査調査区全景



2 岡本地区11次調査調査区（北から）



1 岡本地区11次調査1号土壙
(北から)



2 岡本地区11次調査溝状遺構 (北から)



岡本地区11次調査出土遺物



1 盤石地区2次調査東半調査区全景（西から）



2 盤石地区2次調査西半調査区全景（西から）

1 盤石地区2次調査
1号竪穴住居跡
(北から)



2 盤石地区2次調査
1号竪穴住居跡内
土坑土層断面
(北から)



3 盤石地区2次調査
1号土坑(東から)





盤石地区2次調査出土遺物

1 岡本山地区6次調査Aトレンチ全景（北から）



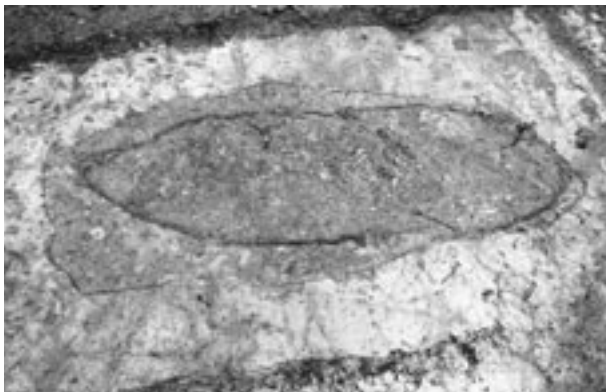
2 岡本山地区6次調査Dトレンチ石戈出土状態（東から）



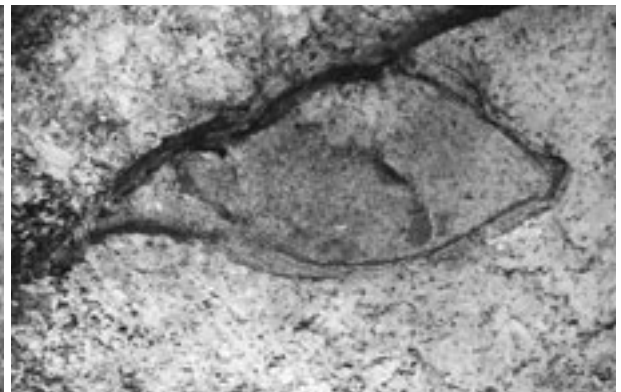
3 岡本山地区6次調査Bトレンチ全景（南から）



1 岡本山地区6次調査Eトレンチ遺構検出状態(南から)



2 岡本山地区6次調査Eトレンチ2号甕棺墓検出状態(西から)



3 岡本山地区6次調査Eトレンチ小児棺墓検出状態(西から)



4 岡本山地区6次調査Eトレンチ1号溝土層断面(南から)



1 岡本山地区6次調査Gトレンチ6号甕棺墓検出状態（西から）



2 岡本山地区6次調査Hトレンチ全景（西北から）



3 岡本山地区6次調査Iトレンチ全景（東から）



1 岡本山地区6次調査Jトレンチ全景（北東から）



2 岡本山地区6次調査Mトレンチ全景（西から）

3 岡本山地区6次調査Lトレンチ2号溝土層断面（東から）



4 岡本山地区6次調査Mトレンチ遺構検出状態（北から）



1 岡本山地区6次調査Nトレンチ遺構検出状態（南から）



3 岡本山地区6次調査Pトレンチ遺構検出状態（東から）



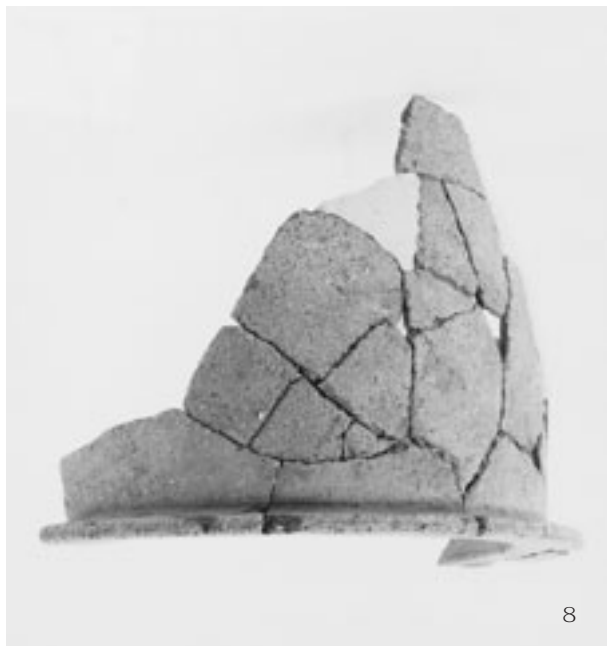
2 岡本山地区6次調査Pトレンチ南壁土層断面（北から）



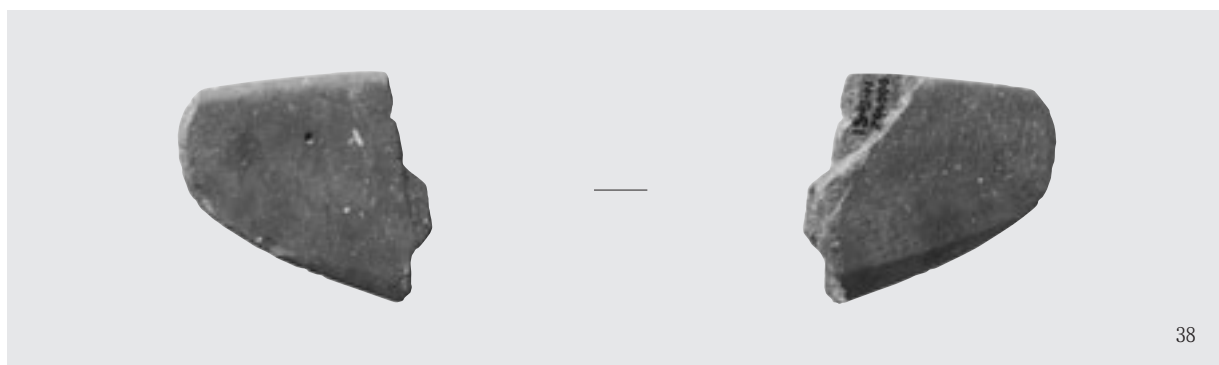
4 岡本山地区6次調査Qトレンチ土層断面（南から）



5 岡本山地区6次調査作業風景



岡本山地区6次調査出土甕棺



岡本山地区6次調査出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	すぐおかもと いせき							
書名	須玖岡本遺跡2							
副書名	福岡県春日市岡本所在遺跡の調査							
巻次								
シリーズ名	春日市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第53集							
編著者名	丸山康晴 境 靖紀 森井千賀子							
編集機関	春日市教育委員会							
所在地	〒816-0804 福岡県春日市原町3丁目1番地5 TEL 092-584-1111							
発行年月日	2008年3月31日							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村番号	遺跡番号					
須玖岡本遺跡 岡本地区 第11次調査	ふくおかけんかすがしおかもと 福岡県春日市岡本 7丁目68番地	40218		33°32'20"	130°26'57"	1996. 4.15 ～ 1996. 5. 2	116㎡	緊急発掘 調査
須玖岡本遺跡 盤石地区 第2次調査	ふくおかけんかすがしおかもと 福岡県春日市岡本 7丁目3番地	40218		33°32'24"	130°27'01"	2000. 4.20 ～ 2000.10.13	137.36㎡	緊急発掘 調査
須玖岡本遺跡 岡本山地区 第6次調査	ふくおかけんかすがしおかもと 福岡県春日市岡本 2丁目92、95、 96番地	40218		33°32'21"	130°27'06"	2001. 1.18 ～ 2001. 3. 8	149.04㎡	重要遺跡範囲 確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
須玖岡本遺跡 岡本地区 第11次調査	集落	中世	土壌、溝状遺構	土師器		12世紀中～後半頃の遺構を確認した。		
須玖岡本遺跡 盤石地区 第2次調査	集落	弥生	竪穴住居跡	青銅器鑄造関連遺物、石器、弥生土器		青銅器鑄造関連遺物が出土した竪穴住居跡は工房跡の可能性はある。		
須玖岡本遺跡 岡本山地区 第6次調査	墳墓	弥生	甕棺墓 円墳	甕棺 石戈 古瓦		弥生時代中期前半の甕棺墓を確認した。甕棺墓は溝を伴うことから墳丘墓の可能性はある。		

須玖岡本遺跡2

春日市文化財調査報告書
第53集

平成20年3月31日

発行 春日市教育委員会
福岡県春日市原町3丁目1番地5
印刷 山口印刷株式会社
伊万里市二里町大里乙3617-5